



TITLE:

自然言語に災いされたヨーロッパ哲学

AUTHOR(S):

山下, 正男

CITATION:

山下, 正男. 自然言語に災いされたヨーロッパ哲学. 人文學報 1992, 71: 1-52

ISSUE DATE:

1992-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/48384>

RIGHT:

自然言語に災いされたヨーロッパ哲学

山下 正 男

1

現在ではヨーロッパ科学も東洋科学もなくなり、ただの科学しかないのと同様、哲学にもヨーロッパと東洋の区別はもはや存在しない。それゆえ本論文でいうヨーロッパ哲学は過去の存在、化石化してしまった存在のことをいう。いまさらそんなものを扱ってもという気がしないでもないが、化石化しながら現在もお結構幅を利かせて歩きまわっている姿が見受けられるので、それを俎上に乗せて料理をしてみるのも一興かと思われる。

ヨーロッパ哲学も中国哲学もインド哲学も、地域名のつく過去の哲学はすべて、自然言語を巧妙に使いながらつくりあげられたものである。つまりヨーロッパ哲学はギリシア語ラテン語を始めとするヨーロッパ諸語を、中国哲学は中国語を、インド哲学はサンスクリット語をそれぞれ使ってつくりあげられた。しかしそれらの言語は自然言語である限り、どれも普遍性をもたない。確かにヨーロッパ諸語とサンスクリット語は、印欧語と総称されるように文法体系はきわめて近い。またその分布範囲も広い。しかしここでいう普遍性は、論理的普遍性のことである。そしてこの意味の普遍性のまえには、どんな自然言語も五十歩百歩といわなければならない。

自然言語が論理的普遍性をもたないだけならまだ許容できる。しかし自然言語はそのうえ、いろいろの欠陥をもつ。それゆえそうした自然言語を使ってつくられた哲学も、そうしたことでいろいろの災いを蒙る。このことは一見合理主義的で普遍的であると思えるヨーロッパ哲学においても例外ではない。そして本論文はヨーロッパ哲学のそうした事態を多くの実例を提示しながら検討することを目的とする。

本論文は別にヨーロッパ哲学を私的怨恨から攻撃しようとするものではない。本論文の採る方法を貫徹させれば、中国哲学にもインド哲学にもそしてもちろん日本の哲学にもその鋒先が向けられるのは当然である。

以上のような目的を遂行するために本論文はヨーロッパ哲学が、自然言語であるヨーロッパ諸語の文法体系や文法的カテゴリーにいかにか依存しているかを示すという戦略をとりたいのであるが、基準となる文法としてギリシア文法、ラテン文法を使った方がいいのであるが、問題

は近世・近代にまで及ぶのだから、思いきって英語の文法を基準とすることにしよう¹⁾。

2

英文法では名詞は(1)物質名詞, (2)抽象名詞, (3)普通名詞, (4)固有名詞, (5)集合名詞の5種類からなる。面白いことにそうした5種の文法的分類は、ヨーロッパ哲学の諸流派と符合する。

ヨーロッパの哲学はターレスから始まったとされている。そしてターレスは万物の起源は水であるといった。そしてこの水はもちろん物質名詞(material noun)である。ターレスの次にアナクシメネスは空気が万物の原理であると主張し、最後にヘラクレイトスは火が万物の根元だと主張した。ここで土の番になるはずだが、誰も土が万物の起源とはいわなかった。土は重くて卑しいからである。しかし土を無視するわけにもいかず、その後エンペドクレスが、火、空気、水、土という四つの元素が万物の根元だという四元論の立場を主張した。

以上の状況を総括してアリストテレスは「最初に哲学を研究した人々の大部分は、質料(hylē, materia)を万物の起源と考えた」と述べている。

つぎに抽象名詞であるが、プラトンのイデア論でイデアはしばしば抽象名詞で表現される。例えば『パイドン』において「等」のイデアは isotes, 「小」のイデアは smikrotēs で現わされる。そしてこれらは英語では equality および smallness と訳される。しかしイデアを指すにはもう一つの表現があり, auto to ison (等そのもの), auto to kalon (美そのもの) という表現であり, 英語では the Equal Itself, the Beautiful Itself と訳される。これは確かにイデアを表わす言い方ではあるが, しかし equal things, beautiful things とは峻別される。なぜなら後者は個物を指す表現だからである。

イデアの離在性超越性を示すためにはもちろん抽象名詞の方がいい。しかしギリシア語ではラテン語や英語ほど抽象名詞表現が発達しなかった。現に美の抽象名詞 kalotes はずっと後のストア派のクリュシポスによって始めて造語されたのである。このような抽象名詞の欠乏がプラトンをして the Beautiful Itself という苦しい, そしてまぎらわしい表現をとらせたのである。しかしそのつけはやがて廻されてくる。というのも The equality is equal という間違いは誰一人として犯す者はないが, The Equal itself is equal という間違いは, その語形からして犯されやすいのであり, プラトンもその間違いを犯しているのである。しかしプラトンの場合, それは単に文法的ミスというよりもっと根深いものがある。プラトンにとって美のイデアは抽象的存在ではなく, それ自身光り輝く存在であり, 赤のイデアはそれ自体赤くもなんともない抽象的な赤などではなく, この世のものとも思えぬ赤さをもつものだったのである。しかしプラトンのこの神話の名ごりを留めたイデア論は, それ自体論理的矛盾をはらむものであり, この

点を弟子のアリストテレスが激しく批判するのである。

先に名詞は5種類に分類できると述べたが、そのうちいま述べた物質名詞と抽象名詞はお互いによく似た性質をもつ。そしてこの双子の名詞の共有する最も顕著な性質は、ともに複数形をもたず、それゆえ、*a* といった不定冠詞をとらず、*this*（単）とか *these*（複）といった指示代名詞をもとらないということである。抽象名詞に複数形がないということは、抽象名詞から発想されたアイデアというものの唯一性と一意性の存在と符合する。物質名詞に複数形が認められないということも物質名詞から発想された質料というものの連続的一体性のイメージと符号する。とはいえ物質名詞については実をいえば、複数形が存在する。例えば *water* という語には *waters* という複数形がある。そしてこの現象はギリシャ語にも、ラテン語にも見られる。しかし *water* を例にしていえば、この語は *mineral waters*（鉱泉水）、*table waters*（食卓水）などで複数にして使われる。ともになん本かのびん詰めの水を意味する。しかし日常言語でなまじっかこうした表現があるものだから哲学者までがついひっばられてしまう。

例えばトマス・アクィナスは *materia*（質料）を *materia communis*（一般的質料）と *materia signata vel individualis*（特定化された質料あるいは個体的質料）とに分けている。しかしこれは彼の挙げている事例つまり *caro et os*（肉と骨の単数形）と *haec carnes et haec ossa*（*caro* と *os* の複合形に“これら”をつけたもの）からみて、物質名詞を一般名詞とおなじに扱うという形で彼の個体的質料の考えをひき出していることは明らかである。確かに肉と骨は、プラトンによって魂と区別され、人間を構成する質料であるという伝統はヨーロッパにあった。そしてたまたま *caro* と *os* という物質名詞が複数形をもってはいた。しかしそのことを一般化して、個体的質料という概念をつくり出すことはやはり不当だといわざるをえない。それに較べれば、同じトマスの *materia dimensionis seu quantitatis subjecta*（寸法という量を受け入れた質料）という概念の方がはるかに好ましい。実際こうしたいい方は、量を尊重する近世科学の考え方ともマッチするし、なによりも一般常識とぴったり合致するのである。というのも、英語では確かに *table waters* といったいい方もないではないが、ふつうはもっときちようめに *a bottle of water* とか *a glass of water* というのである。そしてきちようめんついでに、*one gallon of water* とか *two gallons of water* といった表現をもとるのである。そしてこういうことになるのは物質、質料といったものはもともと自らの形をもたない存在だからなのである。

3

以上、二つの種類の名詞のそれぞれを基盤にもった質料の哲学と形相の哲学について述べた。この双方の母胎となった物質名詞と抽象名詞はよく似た性格の双子の名詞であるが、しかしそのどちらもそれぞれ現実的性格が薄く、それぞれ単独では現実世界の現象を記述することは無

理である。そこで知恵者のアリストテレスは質料と形相の合体を考えつき、こうした彼の著想がその後2000年以上にもわたってヨーロッパ人の心を支配し続ける。アリストテレスの考えはその後スコラ哲学で公式の形をとり、現実の世界にあるすべてのもの、つまり具体的存在 (concretum) はもっとも究極的な質料である *materia prima* (第一質料) ともっとも本質的な形相である *forma substantialis* (実体的形相) の合体にはかならないとされた。

さて前者の *materia* であるが、これはアリストテレスの『自然学』では *hypokeimenon* (基体) であるとされている。つまり万物が生成し消滅してもなお一貫性を保つもの、すなわち生成消滅における万物の基体が質料だと定義されている。この *hypokeimenon* はラテン語では *subjectum* と訳され、ドイツ語では *Substrat*, *Unterlage*, *Substanz* などと訳される²⁾。これらはすべて、変化にもかかわらず、その変化の下で、その変化を支えているという意味をあらわしたものである。このように質料というものはそもそも基体的、実体的なものであるが、この実体性は質料の兄弟分である形相にも付属している性質である。というのも形相は質料に劣らず、永続不変のものだからである。

なんともいうようであるが双子の名詞、物質名詞と抽象名詞は複数形を欠く。そしてこのことは質料と形相がともに個別性を欠くということの意味し、個別性を欠くことは現実性を欠くということの意味する。つまり物質名詞も抽象名詞もそれだけではいわば欠陥名詞であり、質料と形相もそれだけでは欠陥概念である。アリストテレスはこうした二つの欠陥概念を合体させて具体という概念をつくったが、この概念は歴史的に永続きはしたが、二つの要素がそうしたものであるからにはそれらを合体させたところでさして強力な道具とはなりえなかった。

しかしそれにもかかわらず、ヨーロッパでは *materialism* (質料主義、物質主義) と *formalism* (形相主義、形式主義) が長く存続し、質料と形相、実質と形式という概念が執拗に生き続けたのはなぜだろうか。もちろん理由はいくつもあるだろうが、文法的カテゴリーという点にしばって考えれば、質料も形相もともに物質名詞と抽象名詞という文法カテゴリーと結びついてきたという事実が指摘できよう。

さて名詞は確かに英語では *noun* というが、これはラテン語では *nomen* であり、しかも英語の *noun* はより正確にはラテン語の *nomen substantivum* (実体的名詞) と同義である。それゆえ *noun* の日本訳として名詞とともに実詞という語が使われるのである。この *nomen substantivum* は *nomen adjectivum* (実体詞に附属し依存する名詞つまり形容詞) と違って、文字どおり頑丈で執拗な存在なのである。そして一見頼りなげで欠陥品の感じを与える質料という形相の概念が哲学史上きわめて早く登場し、しかも以外なほど長く健闘し続けたのも、それらがともに実体詞と深くつながっていたからにはかならないと考えていいであろう。

4

アイデア論で登場する抽象名詞はすべて smallness のように形容詞からつくられものである。しかし他方、動詞からつくられた抽象名詞もあり、こちらは -tion, -ence, -ment のような語尾をもつ。

文法学者イエスベルセンによると抽象名詞はいわば短縮の作用をもつにすぎないとされる。例えば I doubt the Doctor's cleverness は I doubt that the Doctor is clever の短縮形であり、I saw the Doctor's arrival は I saw the Doctor arrive または I saw that the Doctor arrived の短縮形だというわけである。だとすると抽象名詞を使ったとしてもいくぶん字数が節減でき、しかも心理的に簡潔で引き締まった感じを与えるという効果をもつだけであり、抽象名詞がぜひなければならないというわけのものではないといえる。そして実際、明治初期にきたチェンバレンは日本語に抽象名詞と、抽象名詞を使った構文が少いことに驚いている。

とはいえ抽象名詞は全く無駄かといえは必ずしもそうとはいえない。アリストテレスの10個のカテゴリーの一つに関係のカテゴリーがある。これは relation というふうに英訳され、ラテン語でも relatio であるが、ギリシア語では pros ti（ラテン語では ad aliquid, 英語では to something）という二語である。この pros そして英語の to は日本語の“対”に相等する。例えば“a to b”は“a 対 b”である。そしてこれは ratio（比）と呼ばれる。ところで a と b にもう一つ c を加えて“a to b to c”とすれば“a:b:c”といった連比というものになる。しかしこのように“to something”という操作だけをいくら続けていっても、加速度（accelerated velocity）といった概念は出てこない。そのためには速さつまり（距離：時間）をひとまとめにし、さらにこのひとまとりと時間との比をつくらなければならない。これを英語で表現すれば ratio of ratio of S to t, to t としなければならない。しかもいまの表現ではコンマを省くことはできない。そしてこの表現は明らかに単なる S:t:t ではなくて、 $\frac{S}{t^2}$ なのである。そして後者の概念つまり加速度の概念を得るためにはどうしても a:b ではなしに ratio という抽象名詞が必要なのである。そして実際アリストテレスの to something の表記法、そしてアリストテレスの考え方の母胎となったギリシア数学における比例論の表記法である a:b といったものが、次の時代のヨーロッパ世界において加速度の概念が出現することを大層おくらせたのである。

さきに加速度 accelerated velocity をもちだしたが、velocity は確かに -ity という接尾語からみて抽象名詞である。しかし抽象名詞を使ってさえいればそれですむというわけではない。velocity をまず距離の時間比であると把握し、さらにこの距離の時間比である速さの時間比を考え、その結果この比が一定であれば一定の加速度が存在するということになる。そしてこの

ようにして始めて ratio という抽象概念が本質的な役割を果すのである。

ratio や proportio や proportionalitas のように、うまく使えば大いに意味のある抽象名詞も単純な使い方をすれば、ものごとにことさらもったいをつけるだけで大した意味をもたず、それどころか、有害でさえある。サンスクリットやドイツ語の学術上の文章には抽象名詞が頻用されるといわれるが、これは印欧語全般にわたってみられる現象であるといえる。

抽象名詞は形容詞からつくられる場合と動詞からつくられる場合が多いがしかし名詞から作られる場合もある。『ディオゲネス・ラエルティオス』でプラトンはディオゲネスに向って君は可視的なテーブルとコップを見る目はもっているが、テーブル性とコップ性を見る心の目をもっていない、といい放つ。そしてここでいうテーブル性はギリシャ語で trapezotes であってラテン語では menseitas, 英語では tableity, tablehood と訳され、コップ性は kyathotes で英語は cuphood である。

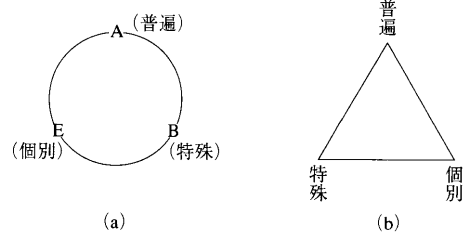
哲学における抽象名詞の使用癖は異様である。名詞の次には代名詞が抽象名詞化される。もっとも有名な例がドゥンス・スコツスの haecceitas (此性) である。このラテン語は haec³⁾ (これ) という女性単数の代名詞に -itas をつけ加えたものであり、ドイツ語では Diesheit, 英語では thisness と訳される。つぎは人称代名詞の抽象名詞化であり, egoity (我性), I-ness, me-ness 等がある。つぎが疑問代名詞の抽象化の quiditas (何性), whatness, whyness がある。そのつぎは副詞のそれで, hereness, nowness, everydayness がそうである。さらに固有名詞 Socrates から socratitas がつくられる。そして遂には前置詞にまで及び betweenity (間性), betweenness そして withoutness 等がある。そして最後は句にまで至り, a se (自らに依って) から aseitas (自存性) が, ab alio (他に依って) から abalietas (依他性) がつくられる。そしてこれらはすべて一般人は使用せず, また理解もしえないことばなのである。

抽象名詞化の悪影響がもろに出たケースを一例だけあげよう。カントは『純粹理性批判』の中で, 4つの三つ組つまり合計12個のカテゴリーを考察した。そして最初の三つ組が(1)単一性 (Einheit), (2)多数性 (Vielheit), (3)全体性 (Allheit) である。しかしこの三つは(1)全称 (das Allegemeine), (2)特称 (das Besondere), (3)単称 (das Einzelne) の三つを抽象したものである。ところが後の三つはさらに(1)「すべての A は B である」, (2)「若干の A は B である」, (3)「この A は B である」の三つのうち, (1)「すべての」, (2)「若干の」, (3)「この」を抽象化したものである。このようにして結局, カントのカテゴリーは「すべての」, 「若干の」といった不定形容詞と「この」といった指示形容詞を, 抽象名詞に変化させたものである。しかし論理的に意味があるのはそうした抽象名詞などではなしに, そのオリジンである不定もしくは指示形容詞なのである。しかもこれらは, 単なる文法的品詞であるだけでなしに, 論理的には限量論理学の限量子および定項としてきわめて重要な存在なのである。

カントにはまだそうしたカテゴリーは論理的に重要な小辞から生みだされたものだという意

識があったはずである。つまり彼のカテゴリーは論理的小辞もしくはそれを使った命題を名詞の形に縮約したものであった。しかしヘーゲルになると、そうした抽象名詞がもとの基盤から切り離されて一人歩きを始める⁴⁾。すなわちヘーゲルは E (Einzelheit, 個別), B (Besonderheit, 特殊), A (Allgemeinheit, 普遍) という三個の

図 1



抽象名詞を三つ組にし、それらを三つの項として扱い、本来の小辞的性格を全く消し去ってしまうのである。そして我が国の哲学者田辺元も、ヘーゲルのこうしたやり方をそのまま受け継ぐ。図 1 の (a) は「認識の形而上学」という題の田辺の講義の謄写刷り速記録からとったものであり、(b) は田辺元全集11巻210ページからとったものである。そしてこの二つから、普遍、特殊、個別が単なる三つの項としてだけ扱われているのを見てとることができる。しかしそうしたことは論理学の本来的性格を全く葬ってしまうことにしかならないのである。

5

以上で物質名詞と抽象名詞のペアを終えたので、こんどは普通名詞と固有名詞のペアに移ろう。こちらのペアはまえのペアにくらべて常識的でとつきやすいのは確かであるが、しかしそれでも自然言語に特有の落とし穴がいくつも待ちかまえているといえる。

さて普通名詞と固有名詞であるが、この二つは図 2 のポルフィリオスの樹の中ではっきり幹の部分と根の部分に区別して登場する。すなわち幹の部分には、例えば corpus (物体), animal (動物), homo (人間) 等がみられるがこれらはすべて普通名詞である。これに対して根の部分には Johanness, Heinricus, Nicolas, Petrus といった語が書き込まれているが、これらは人名つまり固有名詞である。

さて固有名詞は確かにジョンやヘンリーのような固有名であるが、これらは普通名詞に指示形容詞をつけたもの、例えばラテン語の iste homo, 英語の this man と等しい。そこで固有名詞はひとまず置いて、普通名詞の方を考察しよう。

普通名詞が物質名詞と抽象名詞の双方と異なる点は、後者には複数形がないのに前者には複数形があるという点である。つまり後者は uncountable (不可算) であるのに対して、前者は countable (可算) であるという点である。さて man の複数形 men があるとすれば、この men は this man, that man 等々を and で結んだものである。あるいはジョンやヘンリー等々を and で結んだものである。あるいは $man_1, man_2, man_3, \dots$ を and で結んだものである。だとすると、こうしたいくつかの個体から一個の集合をつくることができ、それを $M = \{m_1,$

図2



m_2, m_3, \dots と表記できるであろう。ここで M は集合であり、 m_1, m_2, \dots は M のメンバーである。そしていまの具体例だと M は *man* であり、 m_1 はジョン、 m_2 はヘンリーである。そしてこの *man* は明らかに論理学がいう類 (genus) もしくは種 (species) のことである。そもそもポルフィリオスの樹は幹の部分、例えば *homo* は種や類つまり普遍者 (universale) または共通存在 (commune) という身分をもち、根の部分、例えば ヨハンネスは個 (individuum) の身分をもつ。それゆえポルフィリオスの樹はまさに現代でいうクラス、集合、そしてそのメンバーたちを過不足なく表現しているのである。そしてこれが、ポルフィリオスの樹のイメージの強さ、そして普通名詞と固有名詞のコンビの

もつ強さであるといえる。これに較べれば、抽象名詞と物質名詞のコンビは遙かに劣るといわねばならない。図3は図2のポルフィリオスの樹の向こうを張って筆者がつくりだした図式である。上方に抽象名詞があり下方に物質名詞がある。つまり上方に形相が置かれ下方に質料が置かれている。この上下の差別は *forma* が男性的、*materia* が女性的と考えられたり、*forma* が天上的 *materia* が下方世界的と考えられたりしたことによる。さて図3の水平に引かれた点線であるが、これが現実世界であり、ここに具体物 (concretum) がいっぱい住んでいる。図3の×印のところが具体物であるが、これは $\text{red water}_1, \text{red water}_2, \text{red water}_3, \text{red water}_4$ であり、それらは *mattered form* とでも *formed matter* とでもいいうるものなのである。とはいえ、図3で表現される諸概念はいわばヨーロッパに特有の癖というものであり、現在では普遍性を失い、しかも使用に耐えぬものとなってしまっているのである。

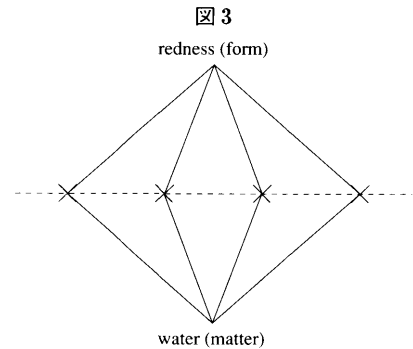
もちろん図2の方にも不十分さはある。図2において、地上部分の幹と地下部分の根とで、集合とそのメンバーとが峻別されている点はりっぱであるが、両者の関係はただ身分を異にする上下二層としてだけ描きあらわされている。そして両者の間に実は $m_1 \in M$, $m_2 \in M$, …… という関係があることはどこにもあらわされていないのである。とはいえそうした関係は、ヨハネスは人間である、ハインリクスは人間である… …といった命題であらわされる。つまり「x は人間で

ある」といった命題の x に代入され、その命題を真ならしめる個体の集合が「人間」だといえるのである。このように集合もしくはクラスとそのメンバーは命題によって結ばれているのだが、図2ではそうした命題的な背景が少しも顧慮されていないのであり、これがまさに名詞主義もしくは名辞主義の面目であるが、そこにおける命題主義の欠落はやはり批難されても仕方がないであろう。

上述のとおりポルフィリオスの樹に登場する homo (man) は明らかにクラス（類・種）もしくは集合である。ところが homo (man) は、自然言語では、一義的にクラスとしてだけ使われるのではない。残念なことに多義性をもつ。そしていまとりあげねばならないのは特に、類種性と個体性の二義性である。英語でいうならば I like a flower (私は花というものが好きだ) というとき、a は generic article (総称冠詞) であり、a flower は一般者を意味する。しかし I have a flower (私は1本の花を持っている) というとき、a は numerical article (数冠詞) であり、a flower は限定された個物を意味する。また the についても同様であり、The cow is a useful animal (牛というものは有用な動物である) という場合は普遍的なるものを、I picked the flower (私はその花を摘んだ) は個体を指す。このように英語には不定冠詞と定冠詞があるが、ギリシア語には定冠詞しかないし、ラテン語にはどちらもない。しかしギリシア語でもラテン語でも普通名詞については普遍と個体の両義性が存在するのである。

さて中世論理学の独創的な理論に代表 (suppositio) の理論というものがある。例えば Homo est species (Man is a species. 人間は種である) において、homo, man, 人間は普遍概念を代表する。しかし Homo currit (Man runs, 人間が走る) において、homo, man, 人間は個物を代表する。つまりこの理論は、homo, man という語の両義性を、その語のコンテキストから判断し、どちらであるかを決定し、混同を回避するための理論である。そしてこうした理論が必要となるのは、そもそも自然言語において、普通名詞が二義性をもっているということに由来するのである。

もちろん、両義性を区別し誤謬をなくするという代表の理論はそれはそれとしてりっぱなも



のである。しかしくだらないトラブルが生じるのはいわゆる普遍論争においてである。つぎの二つの命題を観察しよう。(1) 人間は理性的動物である。(2) ソクラテスは人間である。(1)と(2)で人間がでてくるが、この二つとも普遍の意味で使われているから、なんの両義性もない。問題は(1)の主語である「人間」と(2)の主語である「ソクラテス」である。この二語の(1)と(2)における文法的位置はおなじ、つまり主語の位置にある。さらに(1)と(2)はともに「AはBである」のように主語、繫辞、述語という構造をもつ。ところで(2)の主語は個物を指すから現実世界にその指示対象をもつ。だとすると(2)と似た構文をもつ(1)において、(2)と似たような地位にある「人間」の指示対象もまた現実世界に存在すると主張する中世の普遍実在論者が登場してくる。そしてもちろんそれに反対する唯名論者や概念論者が登場し、三つ巴の争いになる。しかしそもそもそうした争いが生じるのも、(1)の「AはBである」は「 $M \subset R$ 」といった二つのクラスの内含関係を意味するのに対して、(2)の「AはBである」は「 $m_1 \in M$ 」といった個と種の所属関係を意味するということを知らないからである。そしてポルフィリオスの樹は確かに普遍と個の身分は峻別したが、普遍と普遍の関係、普遍と個の関係については留意しなかったのだ、その結果、普遍論争といういらざる問題をつくりだしてしまったのである。

6

以上で5種類の名詞のうち4種類までを終えたので最後の集合名詞 (collective noun) にとりかかろう。トマス・アクィナスは *nomen collectivum* は二つのものつまり *pluralitas* (多性、複数性) と *unitas* (単一性、単数性) を指す両義的な語であると述べている。英文法でよくとりあげられる集合名詞 *family* の例では(1) *My family are all well* (私の家族は全員元気だ) と(2) *My family is a big family* (私の家族は大家族だ) である。ここで動詞に注目すると、(2)では *family* は単数形であるから動詞 *is* も単数形であるのは当然である。しかし(1)では主語が単数だが動詞は複数形なのである。つまりそこでは *family* という語の使用者の関心が *oneness* より *plurality* に向けられているのである。いいかえれば *family* の全体よりは *family* の各部分に向けられているわけである。

普通名詞 *man* は単数形の動詞をとるだけで複数形の動詞は絶対にとらない。しかし集合名詞 *family* は単数の動詞をとるだけでなしに複数形の動詞もとる。*man* が複数形の動詞をとらないということは、*man* が一つのクラスとして、個から離脱していることを意味するが、*family* が自らは単数形でありながら複数形の動詞をとるということは、*family* がクラスもしくは集合ではなくて、集合体、多数体、集計物であることを意味する。それゆえ集合名詞はまた衆多名詞 (*noun of multitude*) ともいわれる。つまり集合名詞は普通名詞とちがって個からの

離陸が十分でないわけである。

さて普通名詞 *man* であるが、これはそのままでは *are* という複数形動詞をとらない。どうしてもというのなら *men* というふうに自らも複数形をとらなければならない。しかしおなじく *men* といっても *All men together are mankind*（一人一人の人間を全部集めると人類となる）という場合と *All men are mortal*（人間は誰しも可死的である）とではちがう。前者の *all men* は *collectively* に（集合体的に）使われている。そして述語の *mankind* は集合体を意味する集合名詞である。他方後者の *all men* は *distributively* に（分配的に）使用されている。

分配的ということばの意味はこうである。*All men are mortal* であれば、*A man is mortal* である。しかし *All men are mankind* だからといって *A man is mankind* とはいえない。つまり *All men are mortal* は *Man₁ is mortal and man₂ is mortal and man₃ is mortal ……* である。ということは *mortal* という語が *man₁* と *man₂* と *man₃* …… に分配されるということである。いいかえれば、*mortal* という語が *man₁*, *man₂* 等々によって共有、分有もしくは共同利用されているというわけである。そしてこのことはまた同一の *mortal* という語が *multiply*（多重化、増殖）したということである。

まえに *family* のような集合名詞は衆多名詞（*noun of multitude*）といった。しかしこの *multitude*（集合体）と *multiple*（多重体）とは区別しなければならない。*family* のような語は父、母、子等々の寄せ集めである。そしてこの語は父の述語にもならないし、子の述語にもならない。しかし *man* のような語は *Plato is a man*, *Socrates is a man* のようにプラトンの述語にもなり、ソクラテスの述語にもなる。つまり *man* はプラトンとソクラテスに均しく分配され、そのような形で多重化し、増殖する。こうして *family* は *multitude*（多数体）であり、*man* は *multiplex*（多重体）である。

それでは *multitude* と *multiplex* のそうした違いの意味するところはなんであろうか。論理学は、「人間」という普通名詞を使って、「*a₁* は人間である、そして *a₂* は人間である、そして *a₃* は人間である……」のような命題をつくる。この場合「人間」は *a₁*, *a₂*, *a₃* …… に分配され、「人間」は *a₁*, *a₂*, *a₃* …… によって多重化される。しかし「*a₁* と *a₂* と *a₃* は人間である」とはいわない。つまりいくつかの個体を「そして」で結んだものつまり *multitude* は論理学では扱わない。そうした多数体はまさに数量的な存在であり、それゆえ論理学ではなしに算術の対象なのである。

「and」という接続詞に関する限り、論理学では「クラス A とクラス B」ということは可能だし、「命題 p と命題 q」ということも可能である。しかし「個体 *a₁* と個体 *a₂*」といったものは論理学では扱えない。「個 *a₁* と個体 *a₂*」はそれ自体ではクラスではない。個の加算されたもの、個の集計にすぎない。そして個の集積は統計学の問題にはなるが論理学の問題にはならない。それゆえ文法における複数概念も、そして衆多名詞といわれる集合名詞も論理学になじま

ず、論理学の守備範囲を越えるのである。

多というものを個プラス個というふうに考える限りこれは数学でいう体 (field) であって、論理学であるブール束ではそういうことはけっしておこらない。ブール束はクラスと命題だけを対象にするものであって個を直接に対象とするものではない。このことはアリストテレスもある程度気付いていたようで、『カテゴリー論』の中で個体の否定は存在しないし、量の否定も存在しないといっている。

西田哲学といえば「一即多」のスローガンで有名であるが、「即」の方はさておき「多」という概念は論理学の域外であり、それゆえそれは論理でなしに数理というべきであろう。とはいえ自然言語も、そしてそれを基礎にした哲学も、その中に論理的構造だけでなしに数学的構造をもっていることも確かである。そしてこのことは自然言語である印欧語の文法の中に名詞の数 (number) があり、数には単数 (singular number) と複数 (plural number) があること、そして動詞にも単数、複数があることからして明らかである。

さて collective noun という語から collectivism という語が連想される。集団主義、集産主義などといわれるが、これは holism, totalitarianism (全体主義), unanimism (一心同体主義、一体主義) とほぼ同義であり、atomism (要素主義、部分主義) と対立する。すべて多や部分がーや全体に吸収されるという思想である。そしてこの全体主義、集合体主義の変種が racism, racialism (ともに人種主義、民族主義), nationalism (国民主義、国粹主義、国家主義), populism (人民主義), 階級主義, 民衆主義, 大衆主義, 会社主義等である。そしてこれらの主義はみな, race, populus, class, people, mass, company といった集合名詞をキー・ワードにもっている。ところで集合名詞といったものは前述のように単一性と数多性というあい矛盾する性質を兼ね具える両義的なこまった名詞であった。それゆえこのような困った語にひきずられてつくりあげられたイデオロギーというものの素性のあやしいしろものであり、理論としては、うまく機能せず、それどころか負の機能をすら発揮してひとびとを困らせたのである。

さて collective noun が collectivism につながるとすれば、当然 common noun もまた communism (共同体主義、共同生活主義、共産主義) とつながる。ところで collectivism と communism とは重なる部分もあるが、しかし基本的なアイデアは異なる。さて common noun であるが、この文法用語は、論理用語としては common term (共通名辞) となるが、むしろそれより general term (一般名辞) の方がよく使われる。general は一般的という意味であるが、この語は genus (類) という語から作られたものであり、類と種は普遍者であるから universal term といってもよいであろう。ところで、スコラ哲学では正当にも commune (共通なるもの) と universale (普遍なるもの) とは区別される。この両者はともに「多くのものによって利用される一つのもの」という意味である。ところで common room (社交室) と呼ばれる部屋は、common といわれるが、universal とはいわない。それゆえ common と universal の違いは

common が部屋とか財物のような物理的なものを共同利用することを意味するのに対して、universal は多くの論理的個体が、類や種のような論理的普遍者を共有することを意味するのである。つまり common は物の共有にかかわり、universal は情報の共有にかかわる。そして確かに universale（普遍者）と individuum（個）の関係は論理的にみて文句のつけようのない関係であり、こうした関係が現代論理学の基礎をなしている。しかし共有される当のものが物財であれば話は全く違っている。物財の共有というものはとかくトラブルを引きおこす種となるから好ましくないといった教訓は、法律にたけていた古代ローマ人の遺した教えであった。そして実際、そうした共有主義、特に唯物論によって強化増幅された近代コンミュニズムは、正確な論理性を欠いたままみきり発車し、集産主義と手をたずさえて、破滅へと向かったのである。

7

以上で名詞の五つの種類の考察を終えたので、こんどは代名詞に移ろう。代名詞は文字通り名詞の代用品だから、そのようなものを調べてみても新しいものはでてこない。むしろ大切なもの、新しいものは指示詞（demonstrative）である。ただし残念ながらヨーロッパ語の文法には純粹の指示語というものはなく、あるのは指示代名詞（demonstrative pronoun）であり、指示形容詞（demonstrative adjective）である。そして前者の例は This is a pen であり、後者の例は This book is good である。しかし前者の this は例えば the instrument which I am speaking of といった名詞の代りだから、名詞に依存しているし、後者の this は形容詞だからこれまた先とちがう意味ではあるが名詞に依存している。

これに反し、現代論理学でいう指示詞は、そうした名詞の依存から全く脱却したものである。それは this, that だといってもいいが、しかしこれらには these, those といった複数形があるので困る。というのも複数形を認めると普通名詞の複数形とおなじで個物の集積となり、論理学からはみだすからである。それゆえ論理学における this と that は固有名詞と同様、複数形をもたない。

さて固有名詞といえばジョンやヘンリーは this man や that man と表現できるといった。そしてこれらはすべて個物を指す。しかし純粹に個物を意味する語としてはジョンやヘンリーは固有名詞という名が示すように唯一つのものに特有だから一般性がなさすぎ、使い道が限られている。しかし this man といういい方も man というクラスのメンバーにしか応用できないからそう広いとはいえない。そこで考えられた表現が this one である。この one は英文法では支柱語（prop-word）といわれる。というのも one が this という指示形容詞の支柱をつとめているからである。そしてこの支柱語には one のほかに thing, body 等がある。

さて this one といういい方であるが、実はこれはアリストテレスがかつて tode ti という表現を使って、個物を意味させたというしろものなのである。ここで tode は英語の this に、ti は one に正確に対応する。ところがこの tode ti は不幸なことに、ラテン語では hoc aliquid と訳された。これは英語に直訳すれば this something である。しかしほんとは something の some は余計であり、this thing の方がいい。これだとラテン語では haec res となり、this one とおなじことになる。そしてスコツスはここから haecceitas (此性) という語をつくったのである。

中世スコラ学者は unum (一), aliquid (或るもの), res (もの) を人や動物といった一般名辞とは別に、それらを超越したという意味で超越語と名づけた。そしてそれらは英語の one, something, thing にあたる。そしてこのうち one と thing は支柱語であるが、something は支柱語に入らない。some が余計だからである。なぜ some が多いかというと、実は thing には、something, everything, nothing の三つが対応し、one には someone, everyone, none が対応するから、something が one や thing と同一とはいえないのである。

さてスコラ哲学が something はとにかくとして、one と thing を、man や animal とはちがう身分のもの、つまり超越的身分のものだとして特別扱いしたことは確かに賞讃に価する。しかし現代論理学はそうした超越語の使用からはるかに進展している。すなわち限量論理学では「 (x) (x は流れる)」つまり「あらゆる x (every x) は流れる」と「 $(\exists x)$ (x は赤い)」つまり「ある x (some x) は赤い」といった二通りの命題が基礎となっている。すなわちそこでは every x と some x が、everyone と someone に代って使用される。すなわち one という超越者の代りに x という変項が登場するのである。しかし one と x のちがいは大きい。というのも one はいかにもスコラ的中世的な存在であるが、 x の方は近世以来の代数学における未知数もしくは変数と肩を並べる存在だからである。そうした意味で x を強いて自然言語の中のボキャブラリーで対応させれば、I know not what, ラテン語の nescio quid つまり the unknown (未知なるもの), the unspecified (特に指示されていないもの) に当たるといえるのである。

とはいえせっかくつかまえた one や thing が x にまで進化し損ねたのは、アラビア代数学を知らなかったということもさることながら、超越者 one や thing を超越者とはいいながら、man や animal とおなじようにクラスを意味する名辞だと考えていたからであると思われる。しかし実は one や thing は名詞ではなく、不定代名詞、いやより厳密に言えば不定詞である。そしてこれに対立するのが、まえに述べた指示詞なのである。とはいえ不定詞という語は既に infinitive の訳に使われているので、まぎらわしい。それゆえ、不定詞のかわりに不定項、指示詞のかわりに定項とした方がいいであろう。そしてこの不定項が変項 (variable) つまり x に、定項がそのまま定項 (constant) つまり a になれば、それがすなわち限量論理学に発展していくのである。

こうみてくれば、アリストテレスが定項に相当することばとして *tode ti* を、スコツスが *haec res* を、つまり *this thing* を使ったのはやはりまずかったということがわかるであろう⁵⁾。つまり定項は単に *this* あるいは *that* でよかったのである。しかしアリストテレスが *thing* を捨てて *this* だけに踏みきれなかったのは、名詞もしくは名辞にあまりにもよりかかり過ぎたからだといわなければならない。この名詞主義もしくは名辞主義 (*terminism*) は、ヨーロッパ人の思考をきわめて永く支配し続けてきたのであり、とりわけ普通名詞、一般名辞の存在は限量論理学の出現にブレーキをかけ続けてきた。実際、図2のボルフィリオスの樹の幹の部分は「人間」を始めとする普通名詞で埋められていたものであり、根の部分であるハインリクスも「この人間」という形で、普通名詞が頑張っていたのである。しかし限量論理学ではそうした普通名詞は王座から完全に追放される。そしてそのことはまた名詞または名辞からなるボルフィリオスの樹というモデルが消滅したことをも意味するのである。

不定代名詞という文法的カテゴリーの考察においてぜひつけ加えておくべきことがある。自然言語である英語では *nothing* という語が *everything* や *something* とともに不定代名詞とされる。しかしこれら三つの語はともに合成語である。とりわけ *nothing* は *not* と *any* と *thing* という三語の合成語である。そして *not* と *any* はもちろん名詞ではないし、*thing* も不定代名詞であって名詞とはいいいがたい。ところでギリシア語でもラテン語でも、*nothing* にぴったり相等する合成語が存在した。ギリシア語の *outi* や *ouden* がそうであり、ラテン語の *nihil* や *nihilum* がそうである。しかしこれらは昔から一方では不定代名詞として使われながら、他方では名詞として、無、空、虚無、無意味、無価値という意味でも使われてきた。しかし幸か不幸か無や空の方は深遠な哲学的概念らしくみえるが、無意味、無価値という意味の方はマイナス・イメージを与えるものであった。そのゆえ哲学者が大真面目で *nothing* について論じていると、ひとから無価値なくだらんことを論じているに過ぎないとひやかされ、さらには *nothing* について論じることにはなにについても論じていないことなのだとなめられたりもした。しかしそれはとにかく *nothing* という語に“いかなるものも～でない”という意味と“無”という意味をもたせるのはよくない。しかしそういう二義性が古くからヨーロッパのいたるところで存在していたということは、*nothing* という代名詞ですら、それを名詞、しかも普通名詞として扱うという名詞主義、名辞主義というものがいかに強かったかということを示すものといえよう。

8

つぎにヨーロッパ語の文法における人称代名詞の名詞化とその肥大現象について述べる。ヨーロッパ諸語に一人称、二人称、三人称のあることはそれ自体けっこうなことではなんのケチを

つけるつもりもない。しかし哲学ではしばしば、人称代名詞を名詞に変え、哲学用語として使う。これはドイツ語において特に多くみられる。すなわち、das Ich, das Du, das Es が頻用され、また das Wir までも使用される。これらは定冠詞がついていることからみて、明らかに普通名詞である。そしてそれゆえにこそ das Nicht-Ich (非我) が存在する。というのも、ich のような本来の代名詞には nicht という否定詞が直接つくわけではないからである。こうしたことはラテン語の ego (自我), alter ego (他我) においてもみられる。そして英語でも哲学用語としてはやはり使用される。しかしさすがに英語ではその扱いはきちんとしていて、例えば、バークレリーは「I という語で指し示されるところのものは、魂もしくは霊的実体によって意味されるところのものとおなじである」といった使い方がされている。これだと I はまだ人称代名詞のままで踏みとどまっているわけである。もちろん I-hood I-ness, I-ship, I-ety のように抽象名詞化すれば、堂々たる名詞である。しかし I をそのままの形で名詞だとするのはなんといっても強引であるが、こうしたことが可能なもの、やはり名詞化、特に普通名詞化への魅力がヨーロッパ語ではいかに強いのかということの一つの証拠だといえるであろう。

こんどは疑問代名詞と感嘆代名詞に移ろう。英語でいえば前者の例は What has he suffered? (なにを彼は苦しんだか) であり、後者の例は What he has suffered! (いかに多くを彼は苦しんだことか) である。つぎに疑問形容詞の例は What thing is it? (それはどんなものか) であり、感嘆形容詞の例は What a thing it is! (それはなんというものだろうか) である。その他疑問副詞と感嘆副詞についても同様である。

このほか、ヨーロッパ諸語では疑問詞と感嘆詞はきわめて緊密な関係にある。パスカルは『パンセ』の中で、無限と無の二つの深淵の間で心はおそれおののき、この神秘を探究しようとする気持ちよりはただただ驚嘆するという心の方が勝ってしまうと述べている。しかしキリスト教的信仰心の強いパスカルは別としてヨーロッパの本流ではやはり探究心がまさる。アリストテレスは『形而上学』1巻2章で哲学は驚嘆することから始まるといっている。しかし驚嘆は単なる始まりであって、驚嘆だけで終ることはない。なぜなら「すべての人間は、生来、知る⁶⁾ことを欲する」からである。ところで最初におこった驚きは問いにかわる。ここら辺の機微は、ヨーロッパ語の感嘆詞と疑問詞のつながりと呼応する。そして知的活動はほんとうは感嘆の次の段階である疑問から始まるのである。

とはいえ、疑問を発するままでは事態は一步も進まない。疑問には答えが必要である。そこでアリストテレスを例にとって問いと答えの対応関係をみていこう。アリストテレスは『カテゴリー論』4章で10個のカテゴリーを列挙しているが、そこで量のカテゴリーを ποσόν というギリシア語で、また質のカテゴリーを ποιόν で、場所のカテゴリーを πού で、時間のカテゴリーを ποτέ でいい表わしている。こうした四つの語の日本訳は「或るこれこれだけの」、「或るこれこれのような」、「或るところで」、「或る時に」と訳すべきであって、「どれだけか」

「どのようなか」、「どこか」、「いつか」と訳してはいけない。というのも後者なら、*πόσον*, *ποῖον*, *ποῦ*, *πότε* であるべきだからである。

これはヨーロッパ語のすべてにいえることであるが、とりわけギリシア語では疑問詞と不定詞が同じ綴りなのである。しかし綴りはおなじでも発音つまりアクセントの置き方が違う。そしてギリシア語ではその違いはアクセント記号を使うことによって字面でもはっきり区別できるのである。ところがそれがラテン語に訳され *quantum*（量をもつもの）となるとアクセントが表記できないものだから、疑問と不定の区別が薄れてしまう。そしてこれがさらに *quantitas*（量）のように抽象名詞化すると、ギリシア語のもとのニュアンスは完全に消える。おなじことは *πότε*（どこ）と *ποτέ*（或るところ）についてもいえ、これがラテン語の *ubi* に訳されると二つのギリシア語の区別が弱まり、さらに英語で *place* と訳されると、原意は完全に消滅してしまう。こうしてアリストテレスのせっかくのカテゴリーも、実体、質、量、時間、場所といった単なる普通名詞の羅列となり、カテゴリーとは単なるレッテル貼りにすぎないではないかと批難されても仕方がないことになってしまう⁷⁾。

ふたたびアリストテレスにもどるが、アリストテレスの量のカテゴリーは前述のように「或るこれこれだけの」であった。そしてアリストテレスが挙げた実例は「二尺」と「三尺」であった。このようにアリストテレスのカテゴリーはまさに、10種類の問いに対するストレートな答えであった。しかも二尺とか三尺といった答えはまさに個別的な答えであり、受け取り手にとっては最高の情報であった。しかしこれに反して「或るこれこれだけの」というのは答えとしては迫力に欠ける。例えば「彼はどこにいるか」という問いに対して「どこか或るところにいる」では答えとしてあまり上等とはいえない。しかしそれでも、「どこにもいない」でもなく「いたるところにいる」でもなく、「どこか或るところにいる」と答えたのだから、情報量はゼロとはいえない。

さてアリストテレスのカテゴリーの把握として「或るところで」、「或る時に」等々に共通にみられる「或る」ということの意味を考えよう。「或る」を使った答えは「この」を使った答えよりは情報量は少いが、しかし情報量をもつことは確かである。しかしこうした「或る」を使った答えと「この」を使った答えだけを、問いに対する答えとすることは、手とりばやい答えではあるが、答えの出し方としては短絡的だといわなければならない。ほんとうに欲しい答えはむしろ「すべての」を使ったタイプの答えがほしい。しかし『カテゴリー論』ではそうした答えはいくら探してもみつからない。そして「すべての」を含むタイプの答えを導き出すためには、 $(x)f(x)$ つまり「すべての x は…である」とか「すべての x において…である」といったタイプの文型が必要である。そしてそのためには x つまり変項という概念を発見しなければならなかったのである。

『カテゴリー論』での答えは「here」であり「somewhere」であった。しかしそれに加えて

「everywhere」を追加してもそれだけではだめである。そのためには新たに x というものが必要である。すなわち somewhere を “at some x ”, everywhere を “at every x ” と把握しなければならない。そしてこの場合 x は変項であるが、同時に変数であるといってもよい。そしてこうした変項もしくは変数を使わなければ、近代論理学も近代数学も成り立たないのである。しかしアリストテレスはこうした x の存在を知らなかった。それどころか x の発見にアリストテレス以後千年以上も費さざるをえなかったのは、ギリシア語を始めとするヨーロッパ諸語にそれをおくらす重大な要因があったからである。

というのも事情はこうである。アリストテレスは $\pi\omicron\upsilon$ (どこに) の問いに $\pi\omicron\upsilon$ (どこか或る場所) で答えた。 $\acute{\rho}\acute{o}\tau\epsilon$ (いつ) には $\pi\omicron\tau\acute{\epsilon}$ (いつか或る時) で答えた。これを一般化してみれば $\tau\acute{\iota}$ (何) に答えて $\tau\iota$ (何か或るもの) で答えた。しかしこの答えの出し方は実ははやまったのである。アリストテレスは『形而上学』で、驚嘆し、探究しようとする哲学者はその時点では無知であるといっている。そして彼はそんなに早く答えを出しすぎずにしばらく無知でとどまるべきであった。つまり $\tau\acute{\iota}$ (何か) の問いに対し、直ちに $\tau\iota$ (何か或るものだ) と応じないで、いちおう x だとしておけばよかったのである。そしてこの x とはまさしく未知項、未知数であり unknown なものだったのである。そしていったんこうした x というものの存在を認めれば、そこから、単に「どこか或る所」とか「ここ」、「あそこ」といった局限した答えしか出ない狭い世界から一挙に脱出できたはずである。しかしそれにしても $\tau\acute{\iota}$ (何か) はつい $\tau\iota$ (何かあるもの) を呼び出してしまふ。この $\tau\iota$ はラテン語では aliquid と訳され、超越者のグループに祭りあげられる。しかしそれは超越者のグループの中でも実は場ちがいだったのであり、ほんとの超越者は res と unum だけであり、これは英語の thing と one となり、これらはさらに everything, something 等々の要素となり、every x , some x における x に近い働きをするようになるのである。

9

以上で名詞を終えたので、動詞に移ろう。情報を提供する最小単位である命題を構成する二大要素が名詞と動詞であるということはアリストテレスが『命題論』で教えるところである。ところで名詞に関してどれだけ多くの落とし穴があり、伝統的な哲学がどのようにしてそれにはまりこんできたかはこれまで縷々述べたとおりである。動詞と名詞のうち、名詞、名辞の方に優位性を与えるという主張を名辞主義 (terminism) という。そしてこの名辞主義は現在ではもはや葬り去られるべき存在である。名辞主義に対しては、動詞に重きを置く主義、例えばパースのレーマ (rhema) の理論や、リッカートの述語の論理 (Logik des Prädikats)、西田の述語の論理の理論がある。こちらの方は現代論理学に述語論理学 (predicate logic) ということばもあ

ることだから、名辞主義よりは有望であるようにみえる。しかし情報というものは名辞だけからも、動詞もしくは述語だけからも得られない。情報は、名詞と動詞からなる命題からだけ得られるのである。

さて動詞であるが、アリストテレスの10個のカテゴリーのうちの最後の4個が動詞である。すなわち(7) *keisthai* (*situs, posture*, 位置)(8) *echein* (*habere, state*, 状態), (9) *poiein* (*facere, action*, 能動), (10) *paschein* (*pati, affection*, 受動)がそうである。いちばん簡単なのは(9)の能動相と(10)の受動相である。これに対し、(7)は、英語にはないがギリシア語の中動相である。そして(8)はラテン語訳で示されたような *habere, have* つまり持つではない。*echein* はむしろ英語の *have + past participle* つまり完了形をつくるときの *have* に相当する。だから一応状態と訳してしかるべきである。このようにアリストテレスは、動詞の四つの文法的カテゴリーをもとにして論理的カテゴリーをつくったのであるが、おなじヨーロッパ語族でも、ギリシア語のそうした文法カテゴリーはラテン語にも英語にもドイツ語にも、そしてもちろん日本語にも移すことは不可能である。そしてギリシア語からの移しかえの試みはすでにラテン語の段階で破綻している。こうした破綻とそこから生じるカテゴリーの無意味さを中世のノミナリストたちはよく知っており、彼らは10個のカテゴリーのうち文法カテゴリーとして無意味になったものをつぎつぎと切り捨て、いわゆる思惟経済の原理をおし進めている。もちろんこうしたプログラムはデカルト、ライプニッツ、スピノザを始めとする近世哲学者も実行していくが、いくら切りつめても、*ousia, substantia* のカテゴリーだけは生き延びるのである。

ところでこの *ousia* であるが、この語は *einai* (ある) という動詞の女性形分詞 *ousa* からつくりだされた抽象名詞であるが、抽象名詞はそれだけでいじくってもなにも出てこないで、もとの動詞、しかも定動詞にもどして考えた方がいい。そこで三人称単数形の *esti* (ラテン語の *est*, 英語の *is*) を考察してみよう。さてこの *esti* であるが、ギリシア文字の表記ではそれは *ἐστί* と *ἐστί* に書き分けられる。そして前者は“がある”の意味であり、後者は“である”の意味である。こうした区別はラテン語では、表記上は不可能だが、意味の上ではそうした二義性が厳然として存在する。すなわち *quaestio an est* (…が存在するかどうかの問題) と *quaestio quid est* (…がなんであるかの問題) の区別がそうである。そしてこうした区別はソクラテスの対話以来おこなわれてきたものであり、対話者はあるものについて論じるにはまずそのものが存在するかどうかを問い、存在することが確認された後、はじめてそのものが何であるかの問題にとりかかるというわけである。そしてこうした区別はさらに *esse existentiae* (存在のある) と *esse essentialis* (本質のある) というふうにも表現される。

さて『カテゴリー論』にでてくる命題の主語はすべて個体である。この点、『トピカ』にでてくる文とは性格が全くちがう。すなわち前者の例は「カリ阿斯は動物である」に対して後者の例は「人間は動物である」である。ところでこうした二つの異種の命題のどちらにも「であ

る」という語が使われている。そしてこの「である」は *essentia* の方の *esse* である。というのも、「動物」はカリヤスの本質をなすし、また「人間」の本質をもなすからである。ここまでは問題はないが、しかし『カテゴリー論』に出て来る命題、つまり主語がカリヤスのように個体である命題において、この個体は存在するものなのである。ところが「人間は動物である」の場合の人間はクラスであるから存在しない。だとすると「カリヤスは動物である」の「ある」は動物に対しては「である」であるが、「カリヤス」に対しては「がある」だといってもよい。このように単称命題における“ある”つまり“*est*”には「本質」と「存在」という二義性を認めてもいいのである。そして実際アリストテレスは *ousia*（実体）つまり「あるもの」を第一実体と第二実体にわけ、第一実体はカリヤスのような個体に宛て、第二実体を「人間」や「動物」のような種や類に宛てたのである。

ところが「人間は動物である (*homo est animal*)」の場合は全くちがう。ここでの *est* は、主語が個体でないから、「である」としか解せない。*Corsicus est animal* の場合は自然言語である *est* の二義性を認めることができた。しかし *Homo est animal* の場合は二義性を認めてはいけない。つまり *existentia* の方は拒否しなければならない。なぜなら *Homo est animal* は *Homo est animal rationale*（人間は理性的動物である）という定義文から論理的に導き出されたものだが、そうした定義文にはそもそも真偽はなく、また現実存在する個物とのつながりは一切遮断されているからである。

定義文や、普通名詞を主語にいただく文章での動詞「ある」を「である」だけでなしに「がある」の意味をも与えようとするのは *est*（ある）の二義性の悪用である。悪用といって悪ければ誤用である。そしてどちらにしてもほめたことではない。しかしこうした困ったことを哲学者たちは大っぴらでおこなってきたのである。

とはいえアリストテレス自身はそんなことをやってはいない。彼は図2のポルフィリオスの樹の幹の要素同士からつくられた文章には、「がある」の要素は一切含まれないこと、つまり根の部分から切り離された幹だけでは、それこそ根なし草であることを知っており、それゆえ『カテゴリー論』ではもっぱら、根の部分と幹の部分を結ぶことによって生まれる命題を扱ったのである。そして結局、幹の部分だけの処理法は近代のクラス論理学となり、幹と根をひっくりめたものの処理法は述語論理学となったのである。

とはいえ現代の論理学では「である」と「がある」はどのように使い分けられているのだろうか。まず「である」の方であるが、これは類と種の包摂関係、例えば「人間は動物である」といった場合に使われる。しかしこの場合、主語である「人間」が存在するとはいわれない。なぜなら「がある（存在する）」といわれるのは主語が個体の場合だけだからである。ところで「ソクラテスは人間である」という命題において、ソクラテスに対して「である」という動詞を使うことができるのは見てのとおりであるが、なおソクラテスのような個体については「ソ

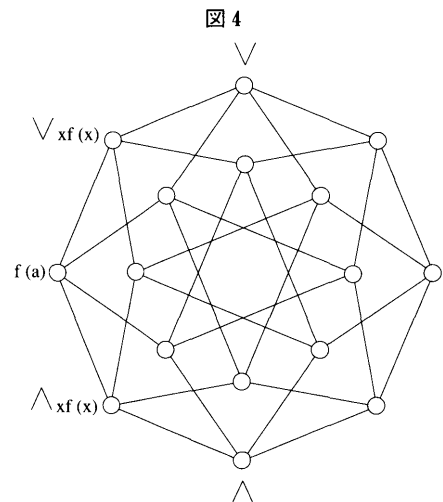
クラテスが存在する」ということができる。そしてソクラテスの場合は実在の人物だから「存在する」といえるのだが、ハムレットやドン・キホーテのような架空の人物は「存在しない」といえる。こうして個物については「存在する」、「存在しない」といえるが、類や種については「存在する」といっても「存在しない」といっても無意味なのである。

ところで限量論理学で主語は必ず個体でなければならないことになっている。したがって「aは存在する」と「aは存在しない」におけるaはもちろん個体であって、aが類や種となることはない。だから「人間は存在する」とか「人間は存在しない」といった無意味な命題が作られることは絶対ないのである。

さて「aは存在する」のaにソクラテスを代入するとその命題は真となり、「aは存在しない」は偽になる。しかしaにハムレットを代入すると「aは存在する」は偽となり、「aは存在しない」は真となる。つぎに $(x)(xは存在する)$ と $(\exists x)(xは存在する)$ といった限量的命題の真偽を調べてみよう。前者すなわち「すべての個体xは存在する」は偽である。なぜならすべての個体の中にはハムレットやドン・キホーテが含まれており、彼らは存在しないからである。つぎに後者すなわち「或る個体（若干の個体）xは存在する」は真である。なぜならソクラテスもプラトンも実在するからである。

ところで $(\exists x)f(x)$ という表示法は、「fであるようなxが存在する」というふうに読まれることがある。 $(\exists x)$ というおかしな記号つまりEを水平方向に反転させた文字を含む記号をつくったのはラッセルであった。そしてこれはexistという動詞の頭文字を意味するのであり、だから「存在する」と読まれたのである。しかし $(\exists x)f(x)$ は「或るxが…である」と読んだ方がいい。そしてその理由は、第一に「存在する」は「あるxが存在する」とか「すべてのxが存在する」といった例からもわかるように、 $(\exists x)$ ではなしにfの内容だからであり、そうだとすれば「存在する」は $(\exists x)$ とも (x) とも無関係な動詞だからである。そして第二に、 $(\exists x)$ は (x) と対立するものであり、 (x) を「すべてのx」と読むなら、それに呼応して $(\exists x)$ を「或るx」と読んだ方がいいからである。

こうとなれば限量論理学で、「或るx」を表現するのに「exist」を連想させる $(\exists x)$ を使うより \vee を使った方がずっとよいといえるであろう。つまり $(x)f(x)$ の代りに $\wedge xf(x)$ を、 $(\exists x)f(x)$ のかわりに $\vee xf(x)$ を使うというわけである。すると $\wedge x$ は「すべてのx」、 $\vee x$ は「あるx」と読める。そして \wedge は恒偽、 \vee を恒真とする。する



と \wedge と \vee は図 4⁸⁾にみられるように一番下と一番上に置かれ、 $\wedge x$ と $\vee x$ の上下の対称性もこの図で一見して了解することができるのである。

10

限量論理学では例えば $f(a)$ や $\wedge x f(x)$ にみられるように名詞もしくは項としては a と x つまり個体定項と個体変項だけで十分である。つまり日本語でいえばコレ、ソレ、アレとドレだけで十分である。ところで f に当るのが動詞である。そしてこの動詞のヴァリエティの多さたるや、コレ、ソレ、アレ、ドレと固有名詞といったものに較べると驚くべき量といえる。そして普通名詞もすべて「～は人間である」という形で動詞の一部に吸収されるのである。このような動詞の圧倒的優位性、つまり定動詞の優位性にもかかわらず、哲学者たちはアリストテレスを始めとして、せっかくの定動詞をせっせと名詞化してきた。しかもこうした動詞の名詞化に拍車をかけたのがヨーロッパ語文法の名詞化好みの構造である。例えば英語に準動詞 (verbal, または verbid) と総称されるものがある。これには (1) 不定詞, (2) 分詞, (3) 動名詞が含まれる。動詞は例えば *to destruct the village* を *the destruction of the village* のように抽象名詞に化せられることがあるが、もっと直接的にいまの *to destruct* 自身、不定法として名詞なのである。そしてこのことは分詞と動名詞についてもおなじである。

哲学の用語についていえば、英語では *is* という定動詞が *being* という動名詞となって使用される。フランス語ではむしろ *être* という不定詞が好まれる。ドイツ語では *das seiende* と *das Sein* の両方が使われる。しかしラテン語ではもっと豊富であり、*esse*, *ens*, *essentia* があり、*modus essendi* (存在の様態) の場合の *essendi* は動名詞である。そして本家のギリシア語では *einai* (不定法) と *ousia* と *on* (分詞) がある。しかし本家本元のギリシア哲学者が *ἐόν* (がある) と *ἐόντί* (である) という二種類の定動詞だけを使っていてくれれば、いわゆる *ontology* (存在論、つまり *on* についての学) というつまらないものも生まれはしなかったのだと思うと、ヨーロッパ諸語の名詞化つまり *nominalization* の性癖はなんとも困ったものだといわざるをえないのである⁹⁾。

とはいえこうした名詞化の悪弊は剃刀といわれた鋭利な論理学者によってみごとに摘撓されている。オッカムは『アリストテレス“自然学”設問集』の第10問で、動詞のいたずらな名詞化、実体化、物化を戒めてこういつている。例えば「変化 (*mutatio*) はあるものを失うこと、もしくは獲得することである」といった命題は「あるものが変化する (*mutatur*) とき、そのものはなんらかのものを失うか、もしくは獲得する」と書き替えるべきであるといっている。また同書第20問でも「運動 (*motus*) は連続的である」は「あるものが動く (*movetur*) とき、そのものは瞬間的に位置をかえるのでなしに、徐々に位置をかえる」と書き替えるべきであると

いている。つまり変化とか運動とかの名詞は人間やロバといった名詞とはちがって動詞を名詞化したものであるから、もとの動詞にもどして、名詞の数を減らせというわけである。そしてこれが有名なオッカムの剃刀、オッカムの思惟経済の実践である。

しかしオッカムのこの思考節減の方針は実は不徹底である。変化や運動を動詞にかえただけでは不十分で、人間やロバといった名詞も、完全な動詞化とまではいかなくても、「人間である」、「ロバである」という形で少くとも述語化はしなければならない。そうしてさらに「エチオピア人は人間である」は「あるものがエチオピア人であれば、そのものは動物である」と書き替えねばならない。しかし中世のノミナリストたちがここまで踏み込めなかったのは、ノミナリストたちもまた、名辞主義の枠内を出ることができず、少くとも人間や動物といった普通名詞、一般名辞は命題の主語に立ちうると考えたからである。こうした意味で、確かにノミナリストは抽象名詞からその実体性を奪って主語の座からひきずりおろしたが、人間やロバまで追放し、名詞節減、いやむしろ名詞の全面追放にまで徹底しきることはできなかったのである。

スコラ哲学にはいくつもの公理があるが、その一つに「*agere sequitur esse*（行動は存在に依存する）」といったものがある。例のアリストテレス以来の存在第一主義をそのまま継承した考え方であるが、この *esse* は英語では *be* であり、進行形が許されない動詞、状態をあらわす動詞といわれる。こうした種類の動詞にはほかにも *resemble*, *equal*, *differ*, *belong to* 等があるが、これらは数学および論理学で重要な役割を占める。しかし哲学ではなんといってもこの *be* がヨーロッパでは長い間独走体制をとり、いわゆる存在論をつくりあげる。しかしながら、前述のように、存在論およびその基礎にある *be* にはいろいろと問題があり、現在もはや存在論は維持不能の状態である。しかしそれにつけてもヨーロッパの哲学者が、状態をあらわす動詞 (*verbs of state*) として *be* のかわりに *stand* を使っていたならどれほどよかったかと悔やまれる。*stand* はラテン語では *stare* といい、そこから *status* (*state*) という名詞がつくられた。それゆえ状態動詞の主役は *be* でなしに *stand* であるはずである。さて *stand*, *stare* は「立つ」でなしに「しかじかの状態もしくは関係にある」の意味である。実際、英語では *How do matters stand?*（どういう事情になっているのか）とか *Thus it stands*（こういう訳さ）のように使われる。ラテン語では *Ita res stat* といういい方もあるが、むしろ *Ita se res habet*（事情はかくかくである）というように表現される¹⁰⁾。以上のような名詞のうち *stare* 系からは *state of affairs*（事態）という名詞表現が、そして *habere* 系から *Sachverhalt*（事態）という名詞がつくられる。

さて *be* と *stand* の比較であるが、*be* の方は *S is P* といった主語述語関係にだけ使われるのであるが、こうした文型には普遍性がない。一般に命題が表わす現実的対象は主語述語関係でなしに、事態である。そしてそれゆえに、現代の論理学の命題の指示対象は *state of affairs*

もしくは Sachverhalt だというのである。そしてそれらに対する動詞的言語表現が stand であり、sich verhalten などである。

be 動詞系のギリシア語 ousia はラテン語では substantia と訳された。そして実はこの語の中に stare という動詞が潜んでいるのである。しかしせっかく be 系の語を stand 系の語に訳したのに、stare という動詞の能力を直ちに開発できずに ousia とおなじく実体的などといい続けてきたのは残念としかいいようがない。

11

さきほどのスコラの公理「agere は esse に依存する」に従って agere の方に移ろう。依存するとは、従属し、後に随うということであるが、実際、哲学史的には実体主義 (Substanzialismus, Substantialitätstheorie) が先行し、それに作用主義 (Aktualitätstheorie) が後続する。この二つの主義を霊魂に対して適用しよう。前者では霊魂は、物体様の実体であるとされるのに反して後者では霊魂は機能 (Tätigkeit, Funktion) にすぎないとされる。

agere は esse のような自動詞とはちがって、他動詞である。そこでそうした他動詞の一例として movere (動かす) という動詞をとりあげよう。そしてそれを含むつぎのようなスコラの公理を考察しよう。すなわち Omne quod movetur ab alio movetur (動かされるものはすべて、他のものによって動かされる) という公理をみよう。movere は他動詞であるから、能動形と受動形がある。分詞に関してはラテン語には現在能動形はあるが現在受動形はない。ただし過去受動形はある。しかしいまは便宜上英語で話を進めよう。すると先ほどのスコラの公理は moved があれば必ず mover があると表現できる。こういうふうに書きかえてみると、スコラの公理は同語反復的な真理のようにみえてくる。それは begotten (子) があれば必ず begotter (父) があるという場合にもいえる。後者についてはそれなりの生物学的根拠があるとしても、しかし無性生殖についてはそんなことはいえない。それゆえいまの二つの命題はもっぱら自然言語における能動と受動という文法的カテゴリーにもたれなかった命題である。

ところで仮りにいまの公理が正しいとし、それゆえ $moved_0$ に $mover_1$ があるとする。するとこの $mover_1$ は $moved_1$ として $mover_2$ を必要とする。そして $mover_2$ も $moved_2$ として $mover_3$ を必要とする。こうしてこの連鎖は無限に背進する。しかしこの背進はアリストテレスの原理 *anagke stenai* (無限背進は許されないで、どこかで停止しなければならない) によってストップする。アリストテレスの原理がなぜ真なのかは不可解であり、アリストテレスの好みだとしかいいようがないが、とにかく運動のチェーンはある所で止まる。そして最後の mover が神だというわけであるが、最後というのはいまのように 0 から 1, 2 と背進しての最後であり、最後の動者が神となれば、こんどはこれが最初の mover つまり第一動者だというわけで

ある。

いま述べたような状況が生まれたのも、ラテン語には「動く」という動作を表わす動詞に自動詞がなく、それゆえ「動く」は「動かす」の受動形でしか表現できなかったからである。しかし受動形ともなれば、きちようめんなヨーロッパ語のこととして、どうしても「何によって」ということばが必要となり、動かすものの存在が必然的に要求されたのである。しかしそうしたことはすべてヨーロッパ語文法の土俗性からくることであって、論理的な必然性はない。ところがいったんそうした理屈が固つてくるとそれが第一動者たる神の存在証明にまで利用されるようになる。しかしそうした証明にはなんの論理的効力も存在しない。それどころか、動くものには必ず動かすものを必要とするという抜き難い考え方は、ガリレイ・ニュートンの力学の根幹をなす慣性の法則の出現の邪魔をした。というのも、物体は外力なくしても運動を続けるというのが慣性の法則だからである。

いま述べた中世の運動論はさらに一般化されて因果律の法則がつくりあげられる。ラテン語には *causare*（惹き起こす）という他動詞がある。他動詞であるからには *causans*（惹き起こす者）と *causatum*（惹き起こされる者）というふうに文法がひとりでに歩きだす。もちろん惹き起こす者は *causa*（原因）とも呼ばれ、*causatum* は *effectus*（結果、つくりだされたもの）と呼ばれる。しかしもとの能動者、受動者という意識は抜きがたいものがある。そしてこの能動・受動の構造を用いて $結果_0 \rightarrow 原因_1 = 結果_1 \rightarrow 原因_2 = 結果_2 \cdots$ といった無限背進がおこなわれ、ついには窮極的原因者にいきあたるといった議論が横行する。こうした因果律というものは、不思議なことに、ニュートン力学の内部でも生き延び、さらに量子力学や相対論が出現しても議論される。しかしもともと、因果律といったものは能動・受動という文法的カテゴリーとしてのみ有効なのであって、ニュートン以降の近代物理学とはなんの関係もないし、そうした物理学に因果概念を適用してもなんのうところもないのである。

能動と被動のカテゴリーは確かに文法のカテゴリーだけでなしに、アリストテレスにおける論理学的カテゴリーとしても使用された。そこでは第9、第10のカテゴリーとして、*agere*, *pati* が挙げられ、この二つの不定法はやがて *actio* と *passio* という抽象名詞に置き換えられる。しかしニュートン力学ではそうしたペアではなしに *actio*（作用）と *reactio*（反作用）という新しいカテゴリーが登場する。そしてこうしたペアは、物理学だけではなく、行動科学においても刺激（*stimulus*）と反応（*response*）というペアとして広く応用されるに至るのである。

ラテン語に *locare* という他動詞がある。この語は *locus*（場所）という名詞から派生した動詞であり、なにかを場所的に包むという意味である。そしてギリシア語にはこれに相当する語はない。さてこうした他動詞が存在するとすれば、自動的に *locans*（包むもの）と *locatum*（包まれるもの）というペアが生みだされる。そして当然おなじみの無限遡行が出現する。そしてそれにもまたあるところでストップがかけられる。

ところで、この container (包むもの) と contained (包まれるもの) は、ヨーロッパの同心円的玉ねぎ型宇宙に対応する。つまり中心に地球があり、そのまわりを水圏が包み、その外側を、風圏、火圏、そして最後には、超世俗界つまり天国が包むというわけである。英語の element という語に (1) 元素 (2) 環境 (空間、場所) という二義があるのはそうした理由にもとづく。さらに contained はどうしても container を要求することから、物体の外側が虚空間といったもので囲まれるという考えは受け容れられない。空間は実質的なものであって、真空は絶対に困るというわけである。

こうした包む包まれるの考えは哲学思想にも出現し、先に述べた動かす動かされるの哲学ほどは頻繁でないがいくつもの例がみられる。例えばドイツの実存主義哲学者ヤスパースは das Umgreifende (包越者) という概念を使ったし、日本では西田幾多郎が場所の論理を、高橋里美が包弁証法 (この包は include と英訳された) を提唱した。

しかし「包含」の概念は哲学の独占物ではない。現代論理学のうちのクラス論理学は、包含 (inclusion) の概念を、そして旧論理学は包摂 (subsumption) の概念を使う。これら二語はもちろん include, subsume という他動詞からなるので、能動・受動の関係が存する。そして特にクラス論理学についていえば、それは零クラスと全クラスの間で無限の包含関係を容れうるが、ただそうした関係は直線的な全順序的關係ではなしに半順序的關係なのである。

さてヨーロッパ哲学を文法カテゴリーを使って自動詞の哲学と他動詞の哲学に二分することができる。前者は be 動詞によるギリシア以来の存在論であるが、後者の代表はやはり creator (創造者) と creatum (被造物) を根幹とするキリスト教的哲学であろう。しかしこの二つの哲学のつながりとなるのが、physis (自然) の哲学であり、natura (自然) の哲学であろう。というのも physis のもととなるギリシャ語 phyō は (1) 自動詞生じると、(2) 他動詞生むの二義性があるからである。ギリシャの存在論的哲学は、大地が万物を生み出すとか、万物の父が万物を生むといった神話を廃して、もっぱら自動詞的な「生じる」の方を採り、「存在」の意味にひきつけようとした。ところで physis はラテン語で natura と訳された。そしてこの語は nascor (生じる) という自動詞からつくられた。ところでラテン語には nascor に対応する他動詞が存在しない。それゆえ natura の哲学は自動詞的意義が勝り、ギリシャの存在論とうまく接続した。しかし、ギリシャの physis が自動詞・他動詞の両方を内含しているのに対応し、natura も他動詞が欲しくなってくる。そしてこの欲求は抑えがたく、なんと naturare (生む) という他動詞が中世になって新造されるのである。

しかしいったん他動詞がつくられたとなると、これは文法的必然性によって naturans (生むもの) と naturatum (生まれるもの) という二つの分詞がつくられる。しかもこれらの語が同一の名詞 natura につけられ、natura naturans (能産的自然) と natura naturata (所産的自然) という二語がつくり出される。とはいえこの二語は同一の語である natura が生むと生まれるとい

う二つの意味を兼ね備えているという意味でなんとなくうさん臭い。しかし実際は、中世では能産的自然は神を、所産的自然は被造物を意味した。しかしそれでも、双方におなじ *natura* という語が使われていることから汎神論的、内在神論的な疑惑をぬぐうことができなかった。そこでそうしたあいまいさのない超越神論的な性格を強調するために *creator* と *creatum*（英語の *creature*）という語の方が愛用されたのである。

12

長々とヨーロッパ語の能動・受動という文法装置を論じてきたが、あと二つだけ見逃がせない他動詞がある。そしてそれは(1) *significare*（意味する）と(2) *cogitare*（考える）であり、(1)は意味論にかかわり(2)は認識論にかかわる重大な用語である。そしてこれら二つは、存在論とともに哲学の領域を三分するくらいの勢力の理論なのである。すなわち存在論がヨーロッパ古代に成立したのに対して意味論は中世に、認識論は近世に成立したといえることができる。ところでこれら三つの理論のキー・ワードをなす動詞 *be*, *signify*, *know* は *be* が自動詞で、後の二つが他動詞だという違いがあるとしても、いずれも進行形をもたない動詞という点ではちがいが無い。というのも *signify* を *have meaning*, *know* を *have knowledge*, と書き替えれば、先にあげた三つの動詞は結局、*be* と *have* の二種類となる。ところでこれら二種類の動詞はもともと継続的状况を表示するのだから、それら二つの動詞も進行形にする必要は少しもないのである。ところで継続とは大げさにいうならば不変であり、堅固であり、これがさらに永遠ということになれば、時空の超越にまで行きついてしまう。そして存在論には確かにそういう性格があり、それゆえ存在論はまた本体論とも訳されているのである。つぎに *signify* と *know* であるが、これらはともに永続性をもつことはもちろん、そのうえそれぞれ、*meaning* と *knowledge* という抽象的存在を対象とするわけであり、こうして三つの動詞を基礎とする存在論、意味論、認識論は、それぞれ現実世界とは別の、存在世界、意味世界、叡知世界といった三つの異世界を設定することになるのである。

こうした状況は *signify* と *know* が他動詞であるということからも強化される。確かにアリストテレスは『命題論』において、名詞、動詞、文といったものは他の無意味綴りとはちがって有意味的（*semantikos*, *significativus*）だといった。しかし後代の学者はここから *significare*（*signify*）という動詞を抽出し、この語が他動詞であることから、*significatum*（意味対象、意味内容）という概念をつくりあげた。そして意味論とはもっぱらこうしたまろもろの意味対象の構造を探るものであるということになってしまった。例えば普通名詞“人間”の意味対象はなにか、そしてそれがなんであるかがわかったとしてそうした対象は現実に存在するのか、それとも異世界に存在するのかという問題がもちあがり、これが延々と論じられた。そしてこれが

中世の普遍論争である。しかしいかに必死に意味世界を考究しても、そんなものは、もともと普通名詞という文法概念と、他動詞“意味する”というこれまた文法概念とからたまたま産出されたものであり、そうした意味世界を探究すること自体、方針を誤ったものといわざるをえない。そのうえ、「丸い四角」もいちおうの意味をもち、それゆえこの語の意味対象が現実にはないとしてもどこかの世界になければならず、そしてそのためにも異世界が存在するはずだと主張すれば、それはまさに愚かたしかいいようがないのである。

現代人は論理学の革新によってもはやそんな下らぬことから完全に免れることができたが、非論理的意味論ではいまだに能動・受動の枠組にとらわれた能記 (signifiant) と所記 (signifié) のペア概念が大事に守られてきている。しかしこのペアは他動詞 *signifier* の能動分詞と受動分詞にすぎないのであり、いくら自然言語の分析のためだとはいいいながら道具としてはいささかお粗末にすぎるといべきであろう。

つぎに認識論の方であるが、近世哲学は周知のとおりデカルトの *cogito, ergo sum* (我思う。ゆえに我あり) で始まった。つまり *sum* よりも *cogito* の方が優先することになった。ところが御多分にもれず、この *cogito* が他動詞であった。そこで *cogito* (私は思惟する) は直ちに *cogitans cogito cogitatum* (思惟するものが思惟されるものを思惟する) と書き替えられる。ここで思惟するものは *ego* つまり私であり、思惟されるものは思惟内容である。そしてここからおなじみの形而上学的誇張によって“私”が主観世界をつくり、“思惟されるもの”が観念世界をつくることになる。しかもこの二つの世界は実は一つの世界だということになり、ここに観念論という壮大な哲学体系が生まれる。

ところでドイツ語に *erkennen* という動詞がある。*Erkenntnistheorie* は認識論であるから、この動詞は認識するという意味である。そしてこの動詞も他動詞であるから、能動分詞と受動分詞がある。そして前者つまり *das Erkennende* (認識する者) は *Subjekt* (主観) とされ、後者つまり *das Erkannte* (認識される物) は *Objekt* (客観) とされる。*Subjekt* と *Objekt* は、実は文法用語では *subject* (主語) と *object* (目的語) である。そして他動詞の場合、「主語 (*subject*) + 動詞 + 目的語 (*object*)」ということになる。さらに分詞を使ってこれを書き換えれば、「能動分詞 + 動詞 + 受動分詞」となる。

このように *erkennen* の場合は *object* つまり目的語もしくは受動分詞は、客観つまり、事物的対象世界となる。しかし実はさっきの *cogitatum* は受動分詞であるにもかかわらず、そして *cogitare* の目的語であるにもかかわらず、事物的対象ではなく、思惟内容である。そしてこのことは、受動形である *pensée* が思考内容を意味し、おなじく受動形である *thought* がこれまた思考内容を意味するのと軌を一にする。

このように他動詞の目的語、他動詞の受動分詞には二種の意味が存在するといえる。つまり一つは所産の意味であり、もう一つは対象の意味である。いまの例でいえば *thought* の方は思

考作用の所産であるのに対して、das Erkannteの方は認識作用の対象つまり外部世界である。また哲学で有名な noein（思惟する）というギリシア語についていえば、所産の意味つまり思惟内容は noema といわれ、頭の中に存在するものであり、思惟対象は noumenon（noein の受動分詞）もしくは noeton といわれ、こちらは人間の頭の中の存在ではなしに、頭の外にあるいわゆる叡知界である。

このように思考にかかわる動詞は一方では思考の所産としての思惟内容とかかわり、他方では思考作用の対象とかかわることがわかった。ところで意味論は認識論と兄弟関係にあるから、意味論においても、認識論の二重性に似た二重性が認められる。さて意味論では signify という他動詞が基本になるが、この語はギリシア語の semainein という語にまでさかのぼる。すなわちストアの意味論では、semainein（意味する）の主語は semeion（記号）である。これは noein の主語が noesis、もしくは nous であることと対応する。つぎに semainein の受動形 semainomenon であるが、こんどは受動形 noumenon が外界の万物を意味したのとはちがって、記号の意味内容を指す。そして、外界の事物は別に tynchanon（外物）という語が使われる。こうした意味論における二重性は近世にまで引きずられる。すなわち semainomenon はおなじ受動形である significate もしくは connotation とされ、tynchanon は denotation（指示対象）とされる。しかし前者はまた connotated（内包）とされ、後者は denotated（外延）とされたのである。このようにいちおう意味論における二重性はちがうことばを使うことで区別されるのであるが、それでもしばしば混同がおこなわれ、significate という語は意味内容はもちろん、指示対象にも使用されるのである。

ちなみに先ほど述べた認識論上の主観と客観概念であるが、これは単に文法的カテゴリーからたまたま生みだされたものであり、すこぶるたわいのないしろものである。それゆえ近代の物理学に対してはもはや主観・客観の枠組は有効ではなくなったにもかかわらず、依然としてこの枠組で、量子論や相対論が論じられているのは哲学者の宿業としかいいようがないのである。

13

つぎに他動詞と密接に関係する再帰動詞について述べよう。例えば He killed himself のように、主語と目的語が同一であるような動作を示す動詞を再帰動詞という。そしてそこではもちろん再帰代名詞が使用される。さてここでは自殺（suicide）の問題などではなく自己原因（causa sui）の問題を例にして再帰動詞の意味を考えよう。

まえに、動いているものは動かされているものであり、動かされているものは、必ず動かしてくれるものを必要とし、この操作をくり返すとついに第一動者の神にいたるという説を紹介

した。しかしここに一つの異議が提出される。つまり動いているものは動かされているものとしても、それが *moved by another* でなしに *moved by itself* だとすると、動かし動かされるという連鎖が切れ、神への道は閉ざされることになる。そしてこの *moved by itself* は名詞形にすればラテン語で *suimotio*, ギリシア語で *automaton*, 英語では *selfmotion*, *self-moving*, *self-moved*, *self-movement*, *self motive* 等々で表わされるが、その基礎になるのは *move oneself* (自己自身を動かす) という再帰動詞である。

しかしこのように *move* について再帰性を認めるとことは重大となる。ことは神の存在証明にかかわるからである。そこで動くという動詞に関する限り、再帰性は禁じ手となる。事態は因果性つまり他動詞 *causare* の能動・受動の問題でもおなじである。ひきおこされるものにはひきおこすもの (*causa*) が存在し、この *causa* もまた、それをひきおこすものを必要とし、神にいたるというわけであるが、ここに自己が自己の存在の原因者であるといった自己原因 (*cause sui esse*) を認めると、つまり *to cause oneself* という再帰動詞を許すと困ったことになる。そこでそうしたことを禁ずるために、スコラ哲学では *Nihil est causa sui ipsius* (いかなるものも自己自身の原因たりえない) という公理が採用された。ただしこの公理は世界内の被造物に対してだけ適用されうるのであって、超世界的存在者である神については適用されない。そして神こそは、そして神だけが *ens a se* (自己自身による存在) なのである。ここで *a* はラテン語で、おなじくラテン語の *ab* とおなじであり、英語の *by* (によって) に相当する。この語は“名詞₁ + 他動詞の受動形 + *by* + 名詞₂”の構文に使われ、“主語(名詞₂) + 他動詞 + 目的語(名詞₁)”の受動態である。こうした構文では普通は、名詞₁ と名詞₂ は別のものである。それゆえ *by* + 名詞₂ は *by another*, *ab alio* である。そして被造物にはこれだけが許されるのであるが、神に限って名詞₁ と名詞₂ が同一となり、それゆえ神は *ens a se* (自存者) だということになるのである。

中世における神と被造物の峻別は近世になって崩れる。そして被造物である自然も、人間も、*ens a alio* (依存的存在) であることをやめて *ens a se* になりたがる。そしてここからスピノザに端を発し、ヘーゲルで完成される *Reflexion* (自省, 反照) の哲学, *Selbst* (自己) の哲学が派手に登場する。しかしなんのことはない *Reflexion* は動詞の再帰, *Selbst* (self) は代名詞の再帰といった文法カテゴリーの枠内の概念にすぎないのである。

14

以上で動詞と哲学の関係をいろいろみてきたが、最後に動詞のもっとも重要な性質である時制 (*tense*) と法 (*mood*) について考えたい。ここで文法理論上の面白い概念である *neutral tense* (中立時制) もしくは *generic tense* (総称時制) といわれるものを援用したい。neutral

present（中立現在）は例えば *Twice two is four* ($2 \times 2 = 4$) における *is* の時制であるが、これは時に関係ない一般的真理を示す。とはいえ一般的真理は過去形であらわすこともある。哲学でもっとも有名なのはアリストテレスの *to ti ēn einai* であり、そのラテン語訳は *quod quid erat esse*、ドイツ語訳は *was war es für ein Sein* である。これはいちおう、「それはどんな存在であるかという問いに対して答えられたもの」であるが、「である」の部分に過去形の動詞が使われている。しかしこの過去形は、過去にだけ真であるというのではなしに現在も未来も真であることを意味している。またおなじギリシア語で *gnomic aorist*（格言的不定過去）と呼ばれるものもある。これはさつきの *ēn* が未完了過去であったのとちがうもう一つの種類の過去形だが、過去であることにはかわりない。これは、格言詩や哲学的寸言などによく使われ、過去に生じたことは、そのことにより将来に対して先例となり、未来の者たちに対しても一般的真理として教示されるという意味で過去形が使われるのである。そしてこの *gnomic aorist* はまた *gnomic preterit*（格言過去）ともいわれ、さらに *generic preterit*（一般過去）ともいわれる。「一般」といわれるのは、過去によって、現在と未来をも含ませ、過現未一般を意味させるからである。しかしやはり「一般性」ということになれば、未完了過去や、不定過去よりは現在形の方がふさわしいのであり、現にアリストテレスも *to ti ēn einai* よりは、*to ti estin*, (*quod quid est*, *Was ist das Ding*, そのものがなんであるかという問いに対して答えられるもの) といった現在形の方をはるかに多く使用している。また現在形はユークリッド幾何学の定理の中で使われ、さらに現在はもちろん過去にも未来にも適用可能なニュートン力学の法則の中にも使用されるのである。こうして動詞の時制にはいくつもあるが、その代表は現在形だといえるのである。

時制とおなじように、法にも *neutral mood*（中立法）と呼ばれるものがある。法にはギリシア語では直説法、命令法、接続法、希求法の4つがあり、ラテン語では直接法、命令法、接続法の3つがあり、英語では直接法、命令法、仮定法の3つがある。ところで中立法とは、発言内容に対する話者の心的態度をどれか一つに決めずに保留の状態に、つまり中立状態にしておく場合に使用される法であり、さしあたり直接法と重なりあう。しかしこの中立法もしくは直接法は、時制の場合とおなじように、他の法をも代表しうる一般法という位置にも立っているのである。例えば、プラトン以来の問いかけの一つに、問題になっているそのものが存在するかどうかといった紋切り型のいいまわしがある。ギリシア語では *ei esti* (*whether the thing exists* そのものは存在するかどうか) であって、「かどうか」を問うているにもかかわらず、直接法が使われている。しかしラテン語ではそれを *an sit* というふうに訳し、そこでの *sit* は接続法である。とはいえやはりラテン語も *an est* というふうには直接法も使われ、むしろ、この方が多く使われているのである。しかしこうした場合の直接法は形は直接法であっても、意味的には接続法のもつ意味、つまりこの場合は、「かどうか」という疑惑もしくは疑問の意味を隠しているのである。

さて疑惑とまではいかなく、仮定といった場合、つまり「かどうか」でなしに「もし」といった場合、ギリシア語では *ei* (if) といった接続詞が使われる。そしてこれが条件文である。ところでこの接続詞の後に来る動詞の法は、直接法のほかに接続法や希求法が使われる。しかしこれらの中で条件文に直接法が使われるとき、その条件が実現可能と考えられる場合は事実的条件 (*conditio realis*) といわれるが、実現の可能不可能にかかわらず、端的に仮定し、その論理的帰結を考えようとする場合は不定的条件 (*conditio infinitiva*) といわれる。実は論理学の「*p* ならば *q*」という場合の命題 *p* の法も直接法である。

ヨーロッパ諸語では古典語はもちろん英語においても法の区別はきわめて厳重であり、その使用法もきちんとしている。しかし後代に到ると加速度的に法の区別がゆるやかになって行き、仮定法が直接法に吸収される方向をたどる。するとその結果、やむをえず、こんどは直接法には事実として述べる用法と非事実、もしくは反事実 (*irreal*) として述べる用法があると説明せざるをえなくなる。しかしこうとなれば文字面だけでは事実として述べているのか反事実として述べているのかがわからなくなり、ただコンテキストに頼るだけといった危険な状況になる。

直接法が中立法として、場合によればすべての法の総代表といった働きをするということは一応認めてもよいであろう。しかし諸法間の形態上の消失の結果、他の法が形の上だけ、つまり見かけだけで直接法の姿をとるという事態は困る。というのも、そういう状態ではまさに法の両義性、多義性が生じるからである。そして多義性の存在する余地のあるところには、無知のゆえにか狡知のゆえにか、哲学者という種族が必ず大がかりなあやまちをしでかす。

ラテン語文法では条件文 (*conditional sentence*) は (1) 事實的 (*real*) もしくは論理的 (*logical*), (2) 想定的 (*ideal*), (3) 反事實的 (*irreal*) の三種類にわけられる。そしてこうした3種の条件文は、それぞれ、異った法と時制にしばられた動詞が使われることによって、形態上から簡単に識別できる。そしていまの三種の分類は哲学における諸分派つまり (1) *realism* (現実主義) より正確には *positivism* (実証主義) と *logicalism* もしくは *logicism* (論理主義), (2) *idealism* (観念論, 理想主義), (3) *antirealism* (反現実主義), *utopianism* (空想主義), *supernaturalism* (超自然主義), *surrealism* (超現実主義) に対応する。

(1) に関していえばウィーンに出現した20世紀の論理主義者たちは、おなじ直接法である“*is*”を、論理学的命題で使われる場合と、経験的命題で使われる場合とで区別すべきであり、それゆえ論理学的真と経験的な真を区別すべきであると主張した。また“*Is it good?*”のような疑問文における“*is*”や“*How beautiful it is!*”のような感嘆文における“*is*”は、論理的命題における“*is*”とも経験命題における“*is*”ともちがう身分のものだといって差別した。ところでそうした疑問文および感嘆文における動詞の法であるが、これは確かに、さっきの例のように単文の場合は直接法であるが、しかし *I doubt whether the report is true or not* のような場合には、“*is*”はほんとに“*be*”といった仮定法であらわされるべきなのである。

実際のところ、自然言語における法の区分が完備していれば、いかなる混同もおこりえないのであるが、もともと区別がなかったり、もとはあったが形態上の区別が後になって消失したといったときには必ず二義性が生じ、二義性のあるところには必ず誤謬が生まれるのである。

奇妙なことに論理実証主義者たちは論理的命題と経験命題を、疑問文や感嘆文から峻別したが、義務論的命題の存在を失念しているように思われる。義務的命題は「～すべし」というタイプの命題であり、道徳や法律で使われるタイプの命題である。このタイプの命題は、命令法で表現されることもあるし、It is requested that …のような構文では仮定法であらわされるし、いちばんよく使われるのは、should および ought to という助動詞であるが、実はこの should も ought to ももとはといえば仮定法なのである。命令法がどこからみても、直接法とは区別されていることからみて義務命題をわざわざ事実命題と論理命題から区別する必要がなかったのかもしれないが、しかし義務命題と事実命題はよく混同されるのである。この混同の指摘のもっとも有名な例はヒュームが『人性論』でおこなった is から ought to へと議論が簡単に移行することに対する苦情である。そして実際そうした混同がおこるのも、ought to が仮定法であることが忘れられて、両方とも直接法だという通念が生まれていたことの結果かもしれない。しかしながら、論理実証主義者たちが自らの思想的立場の先駆者であるヒュームによる義務命題の存在の指摘を見おとし、論理命題と経験命題のいずれとも異なる義務命題が、それら両者に劣らない重要性をもつ命題であるということを見逃がしたのは、論理実証主義者の大きな過失だといわなければならない。

15

以上、動詞の時制と法にはそれぞれ neutral なもの、generic なものがあり、前者は現在時制、後者は直接法だと述べた。それゆえこの二つが合体したもの、つまり直接法現在形が、中立性と総括性を兼ね備えているといえることができる。ところでこうした中立性と総括性をなによりも好むのは哲学者と科学者であろう。そしてやがてこの両者が死闘を演ずるようになる。しかしこのうちで科学者は謙虚であった。そして科学者の立場を代弁した論理実証主義者も、自らの縄張りを、論理的命題と経験的命題に限った。そして情意命題はもちろん、当為命題までも忌避してしまった。これに反して哲学者、特に形而上学者は欲が深かった。そしてまさに中立的で総括的な直接法現在形の“is”でもって、あらゆる時制、あらゆる法を意味させようとした。そしてこうした立場こそが存在論であり、プラトン、アリストテレスもこうした立場を採ったが、近世ではヘーゲルおよびヘーゲリアン（この中にはもちろんマルクスも含まれる）がもっとも野放図な形でこうした存在論を極限にまで膨張させた。

しかし一部の哲学者たちはさすがに謙虚さを失わなかった。すなわち“is”が総括的で大風

呂敷であればなおさらのこと、この“is”の中に狭義の直接法現在以外の要素が含まれていることを嗅ぎだそうとし、哲学の延び切った戦線を縮少しようとした。しかも、狭義の直接法現在の意味するもの、つまり論理性と実証性は科学にいさぎよく譲り渡そうとしたのである。

ドイツの哲学者ファイヒンガーは、それまでの哲学者が独断的に「人間の靈魂は不滅である」とか「人間は自由である」といつてきたのに対し、むしろ「靈魂はあたかも不滅である如くだ」とか「人間はあたかも自由である如くだ」といった方がいいと主張した。つまり it is といった直接法は実は as if it were といった仮定法のこともかもしれないと主張したのである。

しかしそれより古く直接法を疑ったのはデカルトである。実際、ラテン語でも、フランス語でも、je doute que (我疑う) という句を冠することによって、それまでの直接法命題を文法的に直ちに接続法に変えることができる。しかし、こんどは cogito, je pense という句を冠頭にかぶせればその内容句は文法的に直接法となる。しかし一部の観念論者が主張したように思惟する我が絶対的だから、その思惟した内容も絶対的だといえそれは思い上りというものだろう。現代英語では I think とか I believe という語は断定的ない方を避けるための表現であって、こちらの方が謙遜であって好ましい。

いま I believe といったが、我信ずのラテン語は credo であり、場合によれば信仰箇条のことを意味する。そして credo に続く文章はもちろん仮定法ではなしに直接法である。しかし credo という語はむしろ credo Deo (Deum, in Deum) (I believe in God) のように、語られた内容でなしに、語る人物に対する信頼が先立つ。そして語っている人物が信頼できれば、その人物の語った内容も信頼できるというわけである。もちろん神はもっとも信頼が置ける存在であるといえるが、中世の人々の信頼しきっていたアリストテレスは、その内容に疑わしい点が次々とあらわれ、人々の信頼を失う。そして神も、その信頼に値するという点は信仰する人にとって動かないとしても、その神の存在を始めから信じていない人々にとっては、宗教的信仰内容は馬の耳に念仏であるし、現代では信仰をもっている人も、まわりには不信仰者がいっぱいいるということをよく理解してきているので、かつてのような信仰の押しつけということではなく、宗教者本来の謙虚さをとりもどしている。

控え目な態度をとるもう一つの哲学として現象学がある。現象学は “It is” といった直接法の文章に “It seems to me that (私にはこうこうに見える)” といった句をかぶせる。It seems はときには as if it were という文章を後に従えることもあるが、そこまでいなくても、とにかく単純に “It is” を額面どおりに受けとることはやめるべきだということを人に覚らせる。そしてこれもまた哲学が己の身の程をわきまえ、自らの任に安んじようとしているといった意味で好ましい態度だといえるであろう。こうして哲学者はかつての独断的な態度、つまりほんとは仮定法を使うべきなのに直接法でいいきるといった態度を慎重に避けるようになってきたのである。

16

動詞が終ったのでこんどは副詞へ移ろう。アリストテレスの『カテゴリー論』では5番目に where のカテゴリーが、6番目に when のカテゴリーがでてくるが、この二つはともに副詞形である。この二つは、対になって現代物理学でも time-space（時空）として受け継がれている。しかし現代物理学は時間と長さだけでなりたつものではなしに、質量という dimension が必要である。しかし質量の方はアリストテレスのカテゴリーの中には出てこないし、自然言語のどこを探しても、質量概念を引きだすヒントになるものは存在しない。

ところで近代科学は中世までの why を問う立場を捨て how を問う立場に徹したといわれる。そしてこの why も how もともに副詞である。しかし how に関していえば、アリストテレスのカテゴリーの2番目である量のカテゴリーと関係する。というのも、やみくもに how といっても、それが直ちに近代科学になるといったものではなしに、how many? how much? how far? how old? といったように、how の後には程度つまり量をあらわす形容詞や副詞がなくてはならない。つまり how という疑問副詞による問いは、量という観点が必要なのであり¹¹⁾、そうした意味では where と when という疑問副詞による問いも、アリストテレスの例のように「市場で」とか「昨日」といった答えでは科学にはならないのであって、ぜひとも量的な答えが必要なのである。

ところでそうした量のカテゴリーであるが、アリストテレスでは poson でありラテン語では quantum と訳され、「何かこれこれだけの」という意味であるが、これらはともに形容詞であって副詞ではない。これはその次のカテゴリーである poion, quale（何かこれこれ様の）が形容詞であるのとペアをなす。つまり quantum は「これこれの量をもつもの」であり、quale は「これこれの質をもつもの」である。しかし量と質のカテゴリーに対するアリストテレスの表現は、後世に大きな誤解を引きおこす。つまりその後たえず量と質は同格の形で横並びの関係に立たせられるからである。しかしアリストテレスの表現は、確かに量も質も、形容詞の形そして形容詞からの名詞化の形をとりはするが、そうした問いに対する答え、もしくはそうした表現に対する実例をみれば量と質の違いは一見にして明らかとなる。というのも量のカテゴリーの実例は「2ペーキユスや3ペーキユス（2尺や3尺）」であるのに対して、後者の実例は「白い」や「読み書きができる」だからである。そして後者はともに形容詞であるが、「2尺、3尺」は実は形容詞ではなくて副詞である。そしてこのことは英語の He is six feet tall（彼は身長6フィートである）において six feet は副詞であることから了解できよう。

このようにアリストテレスをよく読めばわかることが見逃がされ、quantum と quale が quantitas と qualitas つまり quantity と quality というふうに抽象名詞化されて、近世哲学にま

で引き継がれた。例えばヘーゲルの『小論理学』の第一部「存在論 (Lehre vom Sein)」で質と量がちだされしかもごていねいにこの両者の綜合つまり弁証法的統一として Mass がもちだされ、日本語訳はこれに「質量」を当てている。確かに現在でも「量より質を」といういい方がされている。しかしこれは量と質を天秤にかけて、そのうちの質を選ぶとだけであって、両者は峻別されている。しかるにヘーゲルでは両者がいとも安易に綜合され、融合させられているのである。またエンゲルスは自然弁証法なる奇怪なものをつくりあげ、自然界における「量と質との相互転化」の法則なるものを主張している。また世間一般でも、近世科学が質を量に還元してしまったのはけしからんなどという主張がまかり通っている。しかしこれらはすべて、もとはといえばアリストテレスが質と量をとともに形容詞という文法カテゴリーを使って表現したことの後遺症にはかならないのである。

こうしたヘーゲリアンの誤りにくらべればカントの方がまだ可愛げがある。すなまちカントは「すべての S は P なり」、「若干の S は P なり」、「この S は P なり」における「すべての」、「若干の」、「この」を判断の量といい、「S は P である」、「S は P でない」、「S は非 P である」における「である」、「でない」、「非～である」を判断の質といった。そしてこういう使い方をすれば、質と量を単独に使ったり、併用して使ったりすることが可能であり、他方、質と量の統一だの、質と量の相互転換といったつまらぬことをいうことは防げるのである。

とはいえアリストテレスのいう量のカテゴリーはもちろんカントの使ったような量概念ではない。彼が「2 尺」とか「3 尺」といった例を出していることからわかるように、それは単位をもつ数量である。ただし単位にもいろいろあり、「尺」は長さの単位である。しかしそうした各種の単位をすべて抽象してしまえば純粋な数量になる。しかもそうした数とは 2 とか 3 のような個別性がある。さて個別性といえはもう一つそれに似た概念に個性がある。そしてこちらはアリストテレスの愛用するところではカリ阿斯やコリスコスがその例である。ただし前者つまり 2 や 3 が How many という問いに対する答えであるのに反し後者は What? あるいは Who? に対する答えである。そしてこれに答えるのがアリストテレスのカテゴリーの筆頭である実体のカテゴリーであった。ただしヨーロッパ諸語の what, who の使用法に二義性がある。その一つは What is red? (なにが赤いか) であり、もう一つは What is it? (それはなにか) である。そして前者に対する答えが個物つまり第一実体であり、後者に対する答えが、類と種つまり第二実体である。そして現代論理学のうちの限量論理学もしくは述語論理学は What is red? に対する答えとなるタイプの命題を扱うのに対して、算術もしくは数学の方は How much is it? に対する答えとなる数値を扱うのである。こうして現代の学問方法論の双壁の一つをなす限量論理学は個体を扱い、もう一方の数学は個的数量を扱うのである。だとすれば、そこからとり残された第二実体や質のカテゴリーの方は、一方は人間とか馬といった種や類をその実例とし、他方は、白いとか読み書きに優れたといった形容詞をその実例とすること

からみて、これらは両方ともにクラス論理学の対象となるべきものである。そしてこうみてくれば、アリストテレス以来の質と量のカテゴリーを対にして考えるという思考法がいかに古臭いものであるかが十分理解できるであろう。

17

アリストテレスのカテゴリーの考察で最後に残ったのが関係つまり *pros ti* (*ad aliquid*) のカテゴリーである。これはアリストテレスがなまじっか始めから *relation* に当るテクニカルタームを使わなかったことに対しわれわれは感謝すべきであろう。ところでいまの *pros* と *ad* は、ともに前置詞で、英語の *to* に当る。しかしもう少し敷衍して *relative to something else* とか *in relation to something else* としてもいい。アリストテレスの例は半分と2倍であるが、これは「4は何に対して半分か」とか「4は何に対して2倍か」という問いに対して、「4は8に対して半分である」、「4は2に対して2倍である」と答えられるような場面が前提されている。いまの例では *what* とか *something else* に相当するのは数であったが、「カリアスはコリスコスに対してずっと背が高い」という場合には個体であり、「類である動物は種である人間に対して存在の秩序において上位にある」といった場合はクラスとクラスの関係である。こうしてアリストテレスの関係の概念は、近代論理学の重要な一部門である関係論理学や数学の各種の計算へと発展するための正しい萌芽であったといえる。

ところで関係のカテゴリーの基本をなす *pros*, *ad* は前置詞であった。そこでこんどは、前置詞という文法的カテゴリーがヨーロッパの哲学概念にどういう影響を与えたかをみていこう。ただし、前置詞はその後に来る名詞が斜格であることを要求するので、各種の斜格をもいっしょにみていこう¹²⁾。

前置詞を使って組織的に哲学概念をつくりだしたのはやはりアリストテレスに始まる。アリストテレスは『自然学』4巻3章で、場所を *en hō* つまり *in quo inest* (*the place the thing is in* 容器, 場所) で定義し、場所の中に収用されるものを *ho* つまり *quod inest* (*the thing in the place* 内容) で定義している。そして我が国の哲学者西田はやはりそれを踏襲して、場所を「に於いてあるもの」というふう「に於」という語を使って定義している。

さて古代ギリシャに生まれた不思議な哲学概念である質料 (*hyle*) はプラトンでは、場所 (*chōra*) として把握されていた。つまり *en hō gignetai* (*das, in dem alles entsteht*, 万物がそこで生まれるところ, 万物の母¹³⁾) と把握されていた。しかしアリストテレスはそうした質料を *ex hou* (*das, woraus etwas entsteht*, ものがつくりだされるための材料) と把握しなおした。

アリストテレスは有名な四原因説を立てたが、その筆頭はいまの質料因つまり *ex hou* (*out of or of which thing is made*) であり、第二は作用因つまり *hothen* (*whence a thing is* ものの始動

者), 第三は目的因つまり *hou heneka* (for the sake of which thing is) である。そしてこれら三つのすべてにおいて, 原因の種々の側面を示すために, 前置詞が巧妙に使われている。そして最後が形相因であるが, これは例の *to ti en einai* であり, そこで形相は *what it is* (それが何であるか) の“何”に相当し, 前置のつかない *ti* (何) という主語の形で表現されている。

原因はこのように四種に細分されているが, 原因一般を意味する語としては, *dia ti, diho* = *dia ho* (for what, that for which thing is) が使われる。さらに, 以上四種の原因の他に道具因もしくは手段因 (*causa instrumentalis*) として *dihou* = *dia hou* (by means of which) が第5番目としてつけ加えられることがある。世上 *materialism* (唯物論), *teleology* (目的論), *instrumentalism* (道具主義) 等と呼ばれるのは, 以上のようないろいろの種類の原因のうち, 特の一つだけを突出させて強調する立場であるが, それらはなんのことはない, 自然言語であるギリシア語の前置詞から出発しただけのことなのである。それゆえ近代科学にとっては目的概念はもちろん, 原因概念さえも不必要になってしまうのであり, 仮りに使用するとしても, 内容の貧しい大して使い手のないレッテル程度のものでしかないのである。ただしアリストテレスが使った *pros ti* (関係) における前置詞だけは例外であり, これは比例論において例えば 2:3 つまり “2 to 3” といった形で有意義な働きを果すのである。

中世スコラにおいて, 前置詞使用はアリストテレスの創案したものを継承しただけではなく, 独自のものがつけ加えられた。例えば *quo est* (that by which a thing is, ものの存在) と *quod est* (that which a thing is ものの本質) がそうである。ラテン語 *quo* は *ablative* (奪格) であり, 前置詞はなくてもそれだけで英語の *by which* の働きをする。そしてこの場合は行為者の奪格といわれるものであり, 物をあらしめるものつまり *existentia* を意味する。アリストテレスを始め, ギリシアの哲学者は *esti* (is) という一語で存在と本質の両方の意味を表わさざるをえなかったのだが, こうした両義性を解消するため, スコラ哲学者は, *esse* (がある) と *essentia*, *existere* と *esse* (である), *existantia* と *essentia* (本質) のような表現をしてしわけをした。そして *quod est* (essence) と *quo est* (existence) もそうした努力の一環になったのである。

まえに前置詞と再帰代名詞からなる *a se* (自立存在) と前置詞と代名詞的形容詞からなる *ab alio* (他による存在) のペアを紹介したが, その他にも *per se* (through itself, essentially) と *per accidens* (through another, accidentally) のペアがある。前者は“それ自体で”, 後者は“付随的に”の意味である。また *in se*, *ipse in se* はプラトンのイデア論に出てくるギリシア語 *kath' hautō, auto kath' hautō* のラテン訳であり, “それ自体”という意味である。この語はドイツ語では *an sich* と訳されたが, ヘーゲルは巧妙にも, この *an sich* (即自) に対して *für sich* (対自) を対置させ, さらにその統一として *an und für sich* (即且対自) という彼独得の哲学概念をつくりあげた。

ここで理由の概念についてぜひとも注意しなければならないことがある。post hoc, ergo propter hoc (after it, therefore because of it このものの後に、故にこのものの故に) の誤謬というものがある。稲妻の後に雷鳴が聞こえた場合、稲妻は確かに雷鳴の原因であるが、夜の後に昼がやってくるからといって夜は昼の原因であるといえは誤りであるといった誤謬である。この場合原因の候補となるのは稲妻とか夜といった「もの」である。しかしそれとは対照的に英語の because という語はその後に理由となる文章を従えるという形で使用される。しかし「もの」と「文章」のちがいは大きい。ギリシア語では前者は前に述べたように dia ti, dia ho (because of what 何もののゆえに) と問われ、このものの故にと答えられるが、後者では、何であることのゆえに (why) と問われ, dioti (because これこれであることのゆえに) と答えられる。つまり物の場合は for what? に対して for it で答えられ、文章の場合は wherefore? (なぜ) に対して therefore (このゆえに) で答えられる。ちなみにいまの二つ語の語尾の fore は古くは for だったのである。

「もの」と「文」をめぐる対立は ratio や reason という語においてもみられる。すなわち ratio の奪格 ratione は英語の by reason of, for the reason (これこれのゆえに) と訳されるが、この場合、reason はものの場合は原因で、文の場合は理由だということになる。

「もの」と「文」の区別がもっとも大きな喰い違いをみせるのは, causa, cause に関していえば, causa をものにとれば、それは因果関係を意味し、自然学や神学の問題となるのに反し, cause を論理的理由にとれば論理学の問題になるといった場合である。そしてまえにも述べたように、因果律といったものは近代科学ではもはや問題にならなくなったのに反し、論理的理由の方は、現代論理学でも、つまり「ゆえに」という形で立派に生き延びているのである。

18

ヨーロッパ語の品詞の検討の最後として接続詞の検討に入ろう。まず接続詞の一つである「と」をとりあげる。つぎのような誤謬推理をみよう。「3と5は奇数だ。8は3と5だ。ゆえに8は奇数だ。」この誤謬の原因は「と」の二義性にある。すなわち第一前提は「3は奇数であり、5も奇数である」を意味する。つまりそこでは「と」は論理学上の連言を意味する。他方第二前提は「8は3と5の合計である」を意味する。つまりそこでは「と」は算術和を意味する。しかし論理和と算術和はともに日常言語では接続詞「と」で表わされるが、しかしほんとうは別ものであり、それゆえそれを混同するといろいろな誤謬が生じるのである。

いまの誤謬は、伝統的には結合 (composition) のファラシーと呼ばれているものと関係がある。すなわちそのファラシーはこうである。「3と5は奇数だ。ゆえに8は奇数だ。」3と5は8からみれば、部分 (分解されたもの) である。そしてこの部分について真なることを、全体

(結合されたもの)についても真なりと推論すると誤りが生じるのである。こうした結合の誤謬は、功利主義者たちが、個人が豊かになれば全体も豊かになると考えるところにみられるものである。

さて結合についてであるが、この語にも論理的和と算術的和の二義性がある。compositioという語が論理的連言の意味に使われた早い例は16世紀イタリアの論理学者ザバレラが、いくつかの原理を結合して新しい命題を証明するという結合の方法(compositive method)と、逆に複雑な命題を分解して、その原理をみつけ出すという分解の方法(resolutive method)を提唱したというケースであろう。この二分法はデカルトによって継承され、デカルトの精神で書き上げられた『ポール・ロワイアル論理学』の第四部「方法」においてもっともきちんとした形で定式化される。すなわちそこではもっとも一般的で、もっとも単純な命題から一般性のより少く、結合性がより強い(plus composée)命題に達する操作が合成の方法(méthode de composition)と呼ばれ、その逆が分解の方法と呼ばれている。しかしまた後者は分析(analyse)の方法、前者は総合(synthèse)の方法とも呼ばれている。

ところで総合であるが、カントは「すべての物体は重い」という命題を総合判断と呼ぶが、それは「物体」の概念の中に含まれていない「重さ」の概念を「物体の概念」に添付(beilegen)するからであるとされる。そしてこの添付物あるいは添加物というイメージは、論理和というよりは算術和のイメージに近い。もしくは化学的な合成物のイメージに近い。つまり和は和でも論理和ではないのである。

総合という語が論理的和でなしに数学的和、量的和の意味に使われるのはヘーゲルにおいてもっとも甚しい。ヘーゲルにおいて弁証法的総合つまりジュンテーゼはテーゼとアンチテーゼという形で対立する二つのものを、その両者を包含する全体(Ganze)へとアウフヘーベンすることである。そしてアウフヘーベンとは高めて保存すること(bewahren, conservare)を意味する。ここで全体という語が使われていることは注目に値する。つまりヘーゲルの総合は、部分を加算して全体をつくることである¹⁴⁾。そしてそれゆえヘーゲルの立場は論理和をつくることではなくして、加算的和をつくることである。しかしヘーゲルがこともあろうに『論理学』と銘打った書物を始めからしまいまで、論理和でなしに、加算的和で貫いているということは奇怪としかいいようのない事態である。

論理的構造と数学的構造の混淆はなにもヘーゲルに始まったことではない。カントは『第一批判』で、(1)単一性(Einheit), (2)多数性(Vielheit), (3)全体性(Allheit)という量の三つ組のカテゴリーをつくりだしている。そしてこの三つを(1)単称的(Einzelne), (2)特称的(Besondere), (3)全称的(Allgemeine)という三つの論理概念から導き出している。しかしそうしてつくりあげた単一性、多数性、全体性のカテゴリーをこんどは図式論において、(1)一という数(eine Zahl), (2)多数(viele Zahl), (3)数の全体(alle Zahl)といった数学的分野に適用し

ているのである。

とはいえ論理和と算術和の混淆はドイツ観念論の哲学者だけがやっていることではない。イギリスの誇るべき経験論哲学者ジョン・スチュアート・ミルも似たようなことをやっている。例えば「4月1日にA君はハムエッグズ（ハムと卵）を食べたらアレルギー性じんま疹が出た。4月10日にA君はエッグズ・アンド・ベーコン（ベーコンと目玉焼）を食べたらアレルギー性じんま疹が出た。4月20日にA君はエッグノッグ（卵酒）を飲んだらアレルギー性じんま疹が出た。ゆえにA君において卵がアレルギー性じんま疹と関係する」は帰納法の第一類型である一致法による推論である。しかしその前提に使われた接続詞「と」は論理的結合詞ではなしに、加算的な「と」なのである。それゆえベーコンの帰納法はもちろんのことミルの帰納法でも論理学のジャンルに入るようなしろものではないのである。

19

これまでは接続詞のうちの「と」だけに注目してきたが、もう少し範囲を広げてみよう。そしてこんどもカントのカテゴリー論をみることにしよう。カントは『第一批判』で、関係のカテゴリーを、定言的 (kategorisch)、仮言的 (hypothetisch)、選言的 (disjunktiv) という三つの論理学的な命題形式から導き出した。つまり彼はこれら三つのそれぞれから、(1) 内属性と自存性、(2) 原因と結果、(3) 交互作用 (Wechselwirkung) を導き出した。しかしこうした導出は全くのこじつけであり、カントのおこなった汚点として彼のために惜しまれる。ところで「仮言的」は実は wenn (もし~ならば) という接続詞を支えとするものであり、選言的は oder、もしくは entweder-oder (あるいは) という接続詞を支えとするものである。それゆえ仮言的、選言的といういいまわしならまだしも、それを仮設的 (仮説的ではない) とか分離的というふうに変え、さらにそこから因果関係、交互関係へと話を進めるのは、不当な飛躍以外のなにものでもないのである。

カントのように wenn, if の本来の意味を忘れて、仮言、仮説から愚かにも仮設、因果関係へとつき進むくらいなら、if にふみとどまって頑張るほうがはるかにましである。実際ドイツ語では ein Wenn und ein Aber (疑惑と異論) や ohne Wenn und Aber (無条件に) といったいいまわしがある。wenn (もし) も aber (しかし) も接続詞であるが、これを大文字にし、しかもそれに冠詞や前置詞をつけているからには、明らかに接続詞を名詞に変えたものだといえる。これは英語でもおなじであって、if は名詞化され、条件とか仮定という意味が与えられる。また複数形の ifs も存在する。また ifs and supposings という成句もあるが、ここで supposing はもとは接続詞だったのである。

歴史において「もしも」を考えてはいけないといわれる。これを if-questions もしくは

fictional questions の誤謬という。歴史家は例えば関ヶ原の合戦で西軍が勝っていたらといったことを考えてはならないのである。ここで if という接続詞は名詞として扱われ、意味においては fictional (仮空の) とおなじとされる。また might-have-beens (過去の可能性) を考えてはいけないといわれるが、この場合は、動詞が名詞に変じ、そのうえ複数形になっているのである。歴史家は if を論じてはいけないが、詩人は if を歌うのが天職である。そして詩人の歌うユニコーンやヒボグリフは land of If (仮空の国) に住んでいるとされる。そしてこれはピーター・パンが never-never land (空々漠々の国) へ出入りできるとされるのと軌を一にする。

次に選言の接続詞「あるいは」であるが、もっとも有名なものはキェルケゴールの Entweder-order (あれかこれか) であろう。そしてキェルケゴール自身はこれはラテン語の aut — aut だといっている。しかしシェークスピア『ハムレット』の「to be or not to be」もそれに劣らず有名であろう。

こうした either ~ or に対して、neither ~ nor も名詞化して使われる。ドイツ神秘主義者エックハルトは weder diz noch daz (これに非ずあれに非ず) を主張したが、これはディオニュシオス・アレオパギタ『神秘主義』5章におけるギリシャ語 oute ~ oute (例えば神性は霊にも非ず、子性にも非ず、父性にもあらず……) そしてそのラテン語訳 neque ~ neque にまで遡る。そして直接の影響はないにしても、インド神秘主義における neti, neti (非ず、非ず) ともおなじ印欧語として、呼応しあうといえよう。

さらに純粹の否定詞についていえば、フランスの哲学者バシュラールは Philosophie du non (『否定の哲学』) を書いたが、non は接続詞ではないものの論理学で使われる小辞であり、これがここでは名詞化されている。

つぎにドイツの哲学者ファイヒンガーは、Die Philosophie des Als-ob (The Philosophy of 'As if' 『かのようにの哲学』) を出している。

以上、いろいろな接続詞がそのままの形で名詞化されて、哲学上の基礎概念を構成しているという例をあげた。しかし wenn (もし) を因果性という名詞に翻訳してしまうというカント的暴挙はおこなわれていないものの、接続詞に対し、それぞれに哲学的な思い入れがなされている。しかし接続詞はあくまでも文法的、あるいは論理学的のカテゴリーにすぎないのであり、それを踏み越えて、違った領域に対し野放図に適用することは問題であるといわねばならない。

ところでいままで接続詞をそのままの姿で名詞化したといった。例えば if は名詞として仮定という意味が与えられた。しかしそうした名詞化とは別に、語の引用句化、つまり引用符付与による名詞化といったテクニックがある。例えば if を引用符で囲んで、“if” とし、if という語に対し本来の働きを一時的に停止させるというテクニックである。

このテクニックはギリシャ語において開発されたものであり、ギリシャ語では引用符を使わずに、冠詞、しかも中性単数の冠詞である to を使う。例えば to anthropos といわれるとき、

anthropos（人）という名詞は男性名詞だから ho という男性単数の冠詞がつけられるのが普通であるが、ここでは to という中性単数の冠詞がつけられている。するとそのことによって the word or notion man（人という語または概念）という意味になる。また to legei といういいまわしがあるが、これは the word “says”（「話している」という語）という意味になり、まさに現代の論理的意味における括弧付けと同じ働きをする。

ラテン語には冠詞がない。しかし括弧付けの働きに相当する語が中世ラテン語になって作りだされた。それがトマス・アクィナスの著作にもしばしば使われている ly である。そして例えば ly homo とあれば、「人間という語」という意味である。つまり“人間”という現代的表記とおなじである。この ly という不思議な働きをする語は古イタリア語の定冠詞 li の転化だという説と、アラビア語の定冠詞の al の転化だという説がある。しかし現代フランス語の冠詞 le はラテン語の指示形容詞 ille（あの）から発展してきたといわれることからみても、ly の起源はやはりヨーロッパ語内のものと考えられる。とはいえ現代フランス語の le には、中世ラテン語のような働きは失われてしまっている¹⁵⁾。

ヨーロッパ中世の論理学の一分野に代表の理論というものがある。例えば“ひと”という名辞は、(1)ソクラテス、プラトンのような個人を代表する。(2)種概念としてのひとを代表する。(3)“ひと”は2音節であるという場合のように“ひと”という文字記号を代表する。この第三のケースを素材的代表というが、素材とは“ひと”の音声的あるいは字面的な要素つまり物質的要素のことである。現代の論理学では「ひととは歩く」と「ひと」は平がなである」というふうに括弧を使って区別している。

ところでこうした中世の素材的代表において、さきに述べた ly homo（ひとという語）という表現が使われるのであり、ここからみれば、素材的代表の理論はギリシャ語の定冠詞の括弧づけという特殊用法にまでさかのぼるものといってもよいであろう。

20

以上述べたことからわかるように、if を単に名詞化し、そこにさまざまな意義を押し込むといったやり方ではなしに、それに引用符をつけ、もっぱら文法的機能、論理的機能を形式的に把握するといったやり方の方がはるかに健全で、危なげのない態度といえる。そこでそうしたことを補強する意味で、哲学で有名なア・プリオリとア・ポステリオリの概念を分析してみよう。この一対の語は(1)因果系列における、より先なるものとより後なるもの、(2)心理学的にいて生得的なものと後得的なもの、(3)知識論において先天的なものと後天的なもの、つまり非経験的なものと経験的なもの等々いく通りもの意味が与えられている。しかしこれを遡っていけば、結局アリストテレス・スコラ的な用法つまり a priori（より先なるものから）= ex

causis（原因から）と a posteriori（より後なるものから）= ex effectibus（結果からの）に達するが、しかしこれらの副詞句は実をいえば、demonstratio procedens a priori（ex causis）ad effectum（より先なるもの、つまり原因から結果へと進む論証）と demonstratio procedens a posteriori（ab effectibus）ad causas（より後なるもの、つまり結果から原因へと進む論証）から切り取られた部品に他ならないのである。ところでここでの重要なポイントは「論証」というところにある。そしてアリストテレス・スコラでは論証とは三段論法のことである。例えば「すべての動物は実体である。すべての人間は動物である。ゆえに（ergo）すべての人間は実体である」がそうである。それゆえ「より先なるもの」は、原因を意味したのでもなく、先天的・超経験的なものを意味したのでもなく、もとはといえば論証の前提を意味しただけなのである。そしてこの論証でとりわけ重要な意味は、「ゆえに（ergo）」という接続詞だったのである。

さていま「ゆえに」を使った三段論法の例を挙げたが、実はこの三段論法は中世型のそれであって、三段論法のそもそもの発明者であるアリストテレスのそれとは違う。そしてアリストテレスの『分析論前書』では「もし A がすべての B に述語づけられ、そして B がすべての C に述語づけられるならば、A がすべての C に述語づけられることは必然である」となっている。つまり現代風に記号化すれば、 $(p \& q) \rightarrow r$ であって、アリストテレスでは「もし…ならば」と「そして」という二種の接続詞が使われている。しかしこれが、中世の三段論法のタイプでは「ゆえに」だけになっている。ただし、二つの前提は厳密に言えば「そして」でつながれねばならないのであるが、それは省略されているとみるべきであろう。

ところで中世論理学に *propositio rationalis*（論証的命題）というものが登場する。この命題は「二つの定言命題が、“ゆえに（ergo あるいは igitur）”という接続詞でつながれた複合命題である」と定義される。確かに *rationalis* という形容詞には後世いろいろの意味が付け加えられる。合理的だの理性的だの等々である。またそこから *rationalism*（合理主義、理性主義、唯理主義）といった哲学説が生まれる。また *ratio* という語も理性、理、根拠等々の意味が与えられる。しかしそれらの諸概念は広すぎ、しかも定義困難な概念である。しかし、*rational* を“ゆえに”という接続詞、しかもさらには“もし～ならば”といったもっとも基本的な論理的接続詞で解釈するならば、その構造もはっきりし、しかも一義的で有意義な定義をおこなうことができるのである。

まえにカントは関係のカテゴリーをつくるに際して、定言的判断と仮言的判断と選言的判断を出発点としたといった。しかしこの三つ組は実は定言的三段論法、仮言的三段論法、選言的三段論法の三つ組をもとにしたものなのである。さて三段論法とは推論のことであるが、これは英語で *reasoning*、ラテン語で *rationcinatio*、ドイツ語で *Vernunftschluß* という。つまりそこには *reason*, *ratio*, *Vernunft* という語が含まれている。それゆえ理性主義を標榜するということは、推論を、判断よりも、そして概念よりも重視することである。つまり理性の本領は

推論に存するのである。しかしカントは彼のカテゴリー論に関する限り、そうした態度をとってはいないのである。

つぎにヘーゲルはどうかといえば、彼は理性というものにきわめて高い地位を与えた。そして理性というものの真髓が推論にあるということもよく知っていた。しかしその推論の内容に問題があった。ヘーゲルは推論を三段論法とするが、三段論法の三つの項の配列を第一格は個—特殊—普遍、第二格は普遍—個—特殊、第三格は特殊—普遍—個だとする。ここではもはや三段論法の項つまり名辞は人間や動物や実体ではなく、個、特殊、普遍である。しかしこうしたものは、「この」、「若干の」、「すべての」といった形容詞を勝手に解釈して、名詞にでっちあげたものであって、こんなものが三段論法の項にでてくるとは、三段論法の生みの親であるアリストテレスが生きていたらあきれはててしまうであろう。

接続詞を取りあげるに際し、まず「と」と、「そして」という連言の接続詞を取りあげた。というのも「と」は接続詞としては危険なことばであったからである。つまり「と」は命題と命題を結合するし、名辞と名辞を結合する。しかし第三に、ものともものをも結合する。つまり「水素と酸素」のような化合物的な「と」あるいは「1と2」のような算術的な「と」が存在する。それゆえ接続詞「と」に関する限り、文法と存在論、論理学と存在論との境界はぼやけているのである。しかしそうした接続詞は「と」に限られるのであり、それ以外の接続詞例えば「あるいは」は命題と命題、名辞と名辞を結びつけるが、ものともものを結びつけることはなく、「もし」に至っては命題と命題を結びつけるだけであって、名辞と名辞、ものともものを結びつけることはない。それゆえ、接続詞「あるいは」や「もし」から離れないかぎり、存在論もしくは形而上学へ流されていくということはおこりえない。だとすると前述のようにカントが定言的、仮言的、選言的から形而上学的カテゴリーへと簡単にとび移ったのも、定言的、仮言的、選言的が三種の推論を基礎にしていること、とりわけ仮言的推論と選言的推論は、接続詞「もし」と「あるいは」を核にしているという事実を忘れ果てていたことの結果だといわざるをえない。

カントは判断を定言、仮言、選言に三分した。そして肝腎の連言判断の方を忘れていた。しかしそれは彼が判断の分類基準を三種の三段論法に依拠したからである。しかし中世の代表的論理学のテキストであるヒスパーヌスの『論理学綱要』では違う。そこでは、複合命題は条件命題と連言命題と選言命題に三分されている。これはカントの分類よりも豊かであり、かつバランスもよい。しかもこれら三種の命題は、それぞれ“もし～ならば”、“そして”、“あるいは”という接続詞で結合された連結命題であると明記されている。しかもそれは単にそうした接続詞を挙げるというだけでなしに、それらの接続詞に対し、真理値を使つての文脈的定義が試みられている。すなわち、(1)条件命題が真であるためには、後件が真であることなしに前件が真であることは不可能であることが必要である。(2)連言命題が真であるためには、二つ

の部分がともに真であることが必要である。(3) 選言命題が真であるためには、一方の部分が真であれば十分である。こうまでいわれれば(1)の条件命題にはsi, if といった接続詞が使われているが、if の後に続く命題は真とか偽とかでなければならないから、当然その命題の主動詞の法は、直接法でなければならず、接続法ではだめだということがはっきりわかってくる。

以上を念頭に置けば、ファイヒンガーのいう as if の if の後には必ず接続法がやって来るから、そうした命題は真と偽に無関係な命題であるということは明らかである。オーストリアの哲学者マイノクは『假定論 (Über Annahme, On Assumption)』という著書で仮想的対象の問題を扱っている。すなわち彼は現実的对象が exist もしくは existieren する (存在する) のに反して仮象的对象は subsist もしくは bestehen する (存立する) という。そして存在ということが真偽にかかわる事態であるのに対し、存立とは真偽にコミットしない事態であるとされる。しかしこうした存立という概念は、假定もしくは仮想という文法概念を使って構成した方がわかりやすい。実際、マイノクの先程の著書の題名である Annahme という名詞は, angenommen, daß es sich so verhielte (そういう事情だと假定して) というふうに動詞形で使われる。そしてそこでの内容句の動詞は接続法をとっているのである。このことは英語でもおなじであり、先ほどの Assumption という名詞は on the assumption that (～という假定のもとに) というふうに使われる。この場合もちろん if という語も使うが、さらに Suppose I were a bird とか Supposing that I were a bird というふうにも表現される。そしてここでも subjunctive (假定法, 叙想法) の動詞が使われている。ただし if はもちろん直接法の動詞をも従えることができるが、そのときは真偽決定ができるのであって、論理学における假定法とはそうしたものである。ちなみに英語の assumption という語は三段論法の小前提のことを意味することがあるが、この場合の小前提の動詞が直接法であることはもちろんである。

英文法学者エスペルセンは想像的時制 (imaginative tense) という時制を提唱した。例えば if I had money enough now や if I had money enough tomorrow における動詞 had のテンスがそうである。この二例において had は過去時制をあらわすのではなく、まさに現実的時間から超脱した、想像的時間を意味する。しかもこの had は例にみられるように現在を意味する副詞とも、未来を意味する副詞ともいっしょに使われる。つまり想像世界では現在と未来の境界が消えるというわけである。ただしさすがに過去のことがらについては普通、想像の過去完了形が使われ、現在・未来とはわずかに区別されているのである。

21

ヒスパルヌスの連結命題はさっき述べたように、si (もし) を含む条件命題と、et (そして) を含む連言命題と vel (あるいは) を含む選言命題からなっていた。そして条件命題はもちろん、

真偽の決定できる事実命題からなっていた。さらに三番目の *vel* についていえば、先に述べた選言命題の真理条件からもわかるように、排他的選言ではなしに、非排他的選言である。そして現代論理学ももちろんこの非排他的選言を採用し、そのことによって連言命題と選言命題との間の双対性（*duality*）を確保しているのである。このようにみてくるとヒスパーヌスの三つの連結命題は完璧であるといえる。ところが、ヒスパーヌスの『論理学綱要』の異本には、以上三種の連結命題につけ加えて、(4) *propositio temporalis*（時間命題）、(5) *propositio localis*（場所命題）、(6) *propositio causalis*（因果命題）がでてくる。そして(4)は *dum*（*while*）や *quando*（*when*）で、(5)は *ubicumque*（*wherever*）や *ubi*（*where*）で(6)は *quia*（*because*）でつながれている。また中世の他の論理学のテキストでは、(6) とほぼ同じ意味で(6') *propositio rationalis*（論拠命題）が登場する。そしてこれは *ergo*（*therefore*）でつながれている。

以上三つの追加のうち、(6)と(6')は、*if* を用いた条件命題を使って、きちんとした論理命題に書き替えることが可能である。つまり(6)も(6')もちゃんとした論理命題である。しかし(4)と(5)はちがう。これは論理命題に還元することができない命題、非論理的命題である。このようにしていずれの理由によるにせよ、(4)、(5)、(6)、(6')は蛇足だといわなければならない。

ところで(6)の因果命題であるが、この命名は非常にミス・リーディングである。(6)は *because* でつながれることは確かであるが、だからといって必ずしも *cause*（原因）を意味しはしない。カントは上述のように *wenn*（もし）を使う仮言命題から、因果性（*Kausalität*）のカテゴリーつまり原因と結果のカテゴリーを導き出した。しかしこのような暴挙をおこないえたのも、中世論理学における *quia*（原因）— *propositio causalis*（因果命題）— *propositio conditionalis*（仮言命題）といった観念連合によったものかもしれない。

自然言語についていえば接続詞には場所の接続詞と時の接続詞と因由接続詞があるが、特に最後のものは内容が豊富であり、多岐にわたる。すなわち(1)原因（*cause*）をあらわすものつまり *because, as, since, for* (2)結果（*effect* または *result*）をあらわすもの。つまり *therefore, so, then, consequently, so … that, such … that* (3)目的（*purpose*）をあらわすものつまり *in order that, so that, lest* からなっている。

以上三つのうち、(1)は原因という命名が気にいらないが、实例からみて、ほぼ論理的な接続詞だといえる。しかし(2)と(3)はそうではない。特に(3)の目的をあらわすものでは、目的節の動詞は古い文体では假定法をとり、現在でも *may, might, shall, should* をとることからもわかるように、真偽をあらわす事実命題を従えることはない。他方(2)つまり結果をあらわすものではさすがにその動詞は直説法をとる。しかし目的節と結果節は意味的にはきわめて接近している。そして実際、目的論（*teleology*）と因果論（*theory of causality*）・帰結主義（*consequentism, consequentialism*）は案外近い関係にあるのである。そしてこうしたことは、英

語の *so that* が (a) 目的を表わす副詞節を導いて「～するために、～するように」の意味を表わす一方、(b) 結果を表わす副詞節を導いて「…なのでその結果～」の意味を表わすことから納得できるであろう。

とはいえくり返すようであるが、自然言語の接続詞のうち *and* と *or* と *if*、そして *because*、*for* 以外のものはすべて非論理的な接続詞である。それゆえ、そうした自然言語に全面的にもたれかかって、いろいろの哲学説を展開することは劔呑千万なことであり、論理的接続詞以外の接続詞にもとづいて様々な形而上学説をつくりだしても、大した普遍性をもつとは思えないし、ましてや科学に大きく役立つものとは思えないのである。

22

接続詞の議論にちなんで、中世論理学で盛んに論じられた共義語 (*syncategorema*, *consignificative*, *consignificant*) の理論を検討してみよう。まず共義語に含まれる語の実例をあげると次のような三つのグループにわかれる。(1) *omnis* (すべての), *nullus* (いかなる～も…でない), *est* (である), *non* (ない)。(2) *et*, *vel*, *si*, *non*。(3) その他、つまり *necessario* (必然的), *contingenter* (偶然的) 等。

syncategorema という名称は特に (1) のグループにちなんでつくられた。すなわち *syn-* をとりはずした *categorema* はラテン語では *predicatum* つまり述語を意味する。つまり *S is P* における *P* のことである。しかし定言三段論法における定言命題は换位によって *P is S* となりうるから、*S* つまり *subject* (主語) もまた、*P* と等資格になる。それゆえ、*categorema* は *S* と *P* の両方を指す。これに対し *syncategorema* は *categorema* つまり *S* と *P* を助けるもの (*syn-*) のことである。それゆえ共義語は「すべての *S* は *P* である」「いかなる *S* も *P* でない」等における「すべての」、「である」、「ない」等がその例となるのである。このようにグループ (1) はアリストテレスの『分析論前書』の枠内での共義語である。しかしこれに『命題論』の枠を加えると、*categorema*, *syncategorema* が、*significativum* と *consignificativum* へ移行する。というのも『命題論』には *significare* (意味する) の理論、つまり意味の理論が存在するからである。すなわち、*categorema* だけだと、*S* と *P* といった普通名詞しかその中に含まれないが、『命題論』では意味作用をもつものは、名詞だけでなしに、動詞と命題であるとされるから、名詞の他に動詞と命題が新しく自義語として登場することになる。ここで自義語とは、自分だけの力で意味をもちうるものという意味であり、*significativum* の訳であるが、これに対し *consignificativum* は自分の力だけでは意味をもちえず、自義語といっしょになって始めて意味をもつものという意味で、共義語と訳されるのである。

『命題論』では名詞と動詞と命題が自義語であるが、名詞と動詞が結びつけば命題という一

個の完成品となるのであって、その意味で命題が、自然言語においても、論理学においても、いちばん大切な存在だといってよいであろう。そして、それゆえにこそ、アリストテレスの *De Interpretatione* (*On Interpretation*) は『命題論』と訳されるのである。

「すべて」や「ない」は、名詞や動詞といっしょになって始めて意味をもつものとしてももちろん共義語であるが、その後、命題といっしょになって始めて意味をもちうるという種類の共義語つまり、(2) のグループの共義語が新しくクローズ・アップされることになる。そしてそれらは *and*, *or*, *if*, *not* 等であり、これらは *p and q*, *p or q*, *if p then q*, *not p* といった使い方がされる。ここででてくる *not* をグループ(1)にでてくる *not* と区別すべきことはもちろんである。というのも(1)の *not* は *is not*, *isn't* といったふうに使われるが、(2)の *not* は *not p* というふうに使われるからである。このように *p* という自義語と(2)のグループの共義語とを組みあわせることによって、(1)のグループにみられる名辞論理学とは全く別の論理学である命題論理学が新しく発足するのである。

このように意味論の導入、つまり *signify* という動詞の導入において、*syncategorema* (共義語) は *consignify* する (自義語とともに意味をもつ) というふうにだけいっておればよかった。しかし *consignify* もまたある種の *signify* であり、そうだとすれば、共義語もまた *signified object* (意味対象) をもつはずだという困った考えがもち上がってくる。つまり「と」、「もし」、「ない」といった語の対象はいったいなにかということで思い悩むひとびとがあらわれてくる。しかし実はこうした悩みは「人」や「動物」といった普通名詞の意味対象はなにかという、普遍論争における悩みと同質のものなのである。それゆえそうした二つの悩みは同種のものであると考えた方がいい。つまり「人」の意味対象であるいわゆる普遍者が現実存在するのであれば、「と」の意味対象も存在せねばならないし、逆に「と」の意味対象が存在しなければ、「人」の意味対象である普遍者も存在しないというべきなのである。

現代の限量論理学は $f(a)$ を基本形に置き、 $\wedge x f(x)$ を $f(a) \wedge f(b) \wedge \dots$ に還元し、 $\vee x f(x)$ を $f(a) \vee f(b) \vee \dots$ に還元する。こうした立場からすれば、論理的な記号体系が外界と意味論的な対応をもつのは、 a , b , \dots といった個体記号が外界の個体と対応する場合と、 $f(a)$ 全体つまり単称命題がその命題の意味する外界の事態と対応する場合に限られる。それゆえ f 自体つまり動詞は外界に対応物をもたない。さらに「*is a man*」といったものもまた、動詞であり、 f であるからには外界に対応物をもたない。したがって *a man* もまた対応物をもたない。

つぎに \sim (ない) と \wedge (そして) と \vee (あるいは) はどうだろうか。 \sim は $\sim p$ という形で使用される。そして $\sim p$ は命題である。そして命題であるからには外界に事態という対象をもちうるが、 \sim はそうした対象をもちえない。また $p \wedge q$ も $p \vee q$ も命題であるからには外界に事態という対象をもちうるが、 \wedge も \vee もそれ自体では外界に対象をもちえない。

中世の論理学者は *et* や *vel* は *consignificativum* として、それ自体では意味対象をもちえない

いと断言することができた。しかし動詞、名詞（クラス名詞）も実はそれ自体では意味対象をもちえないといいきることをためらい、それらは *significativum* だから意味対象をもつと信じたのである。

接続詞「と」、「あるいは」、「もし」は確かに誰の目からみてもその対象を外界でみつけだすことはできない。それゆえ、中世のひとびとの考えたように、それらを共義語とするには異論はない。実際17世紀に書かれた『ポール・ロワイヤル文法』では、接続詞は思考の対象を表わす記号ではなしに、思考の形態と形式を表わす記号であるとされている。また20世紀のドイツ現象学派の哲学者プフェンダーは「黄金と銀とは貴金属である」における「と」と「である」はいかなる対象にも関係しない純機能的概念であるとも主張した。しかし名詞に関しては、ポール・ロワイヤリストは、思考の対象を表わす記号だとし、プフェンダーも「黄金」と「銀」が対象を意味する概念だとして、アリストテレスや中世以来の伝統に忠誠を誓ったのである。

とはいえ現代論理学はそうした伝説を完全に否定する。命題関数論あるいは述語論理学において $f(a)$ の f つまり関数もしくは述語は f が *function* の頭文字であることからわかるように、機能であって実体とはされない。さらにこの f の中に含まれる普通名詞も実体ではないとされる。ラッセルは中世以来の *syncategorema* にほぼ相当する語として *incomplete symbol*（不完全記号）ということばを提案した。「不完全」とはある語が孤立状態ではいかなる意味ももたず、それ自体で意味をもつ語と一緒にすることによってその語の意味作用を助けるという意味である。彼はもちろんその中に接続詞といった論理的結合詞を含めているが、クラス記号もまた不完全記号の中に含めているのである。クワインは *open sentence*（開放文）というアイディアを提出した。 $\wedge x f(x)$ や $\vee x f(x)$ のような鎖閉文が、真偽をもっているのに対して、開放文である $f(x)$ は真偽に対して開放されているが、それ自体では真偽をもちえないというわけである。そして真であることが決定された文が、現実における特定の事態をその対象としてもつのに反して、開放文はほんとの意味の文、つまり命題ではなくて、単なる概念にすぎず、それゆえ現実界にはその対象をもちえないのである。

このようにスコラ以来執拗にむしかえされた普通名詞に対象ありやなしの論争は、現代論理学の出現とともに、擬似問題として消え去った。しかしそうした擬似問題が生じたのも、アリストテレスが『命題論』の中で、「うま」という名詞からその一部である「う」を切り離せば、それはそれ自体ではなにものをも意味しないといったからなのである。すなわちアリストテレスはそこで *ouden semainei* (*signify nothing* なにものをも意味しない) という表現を使った。しかしだとすると「うま」という名詞はなにものかを意味するのだということになり、「意味する」は他動詞であるから「意味されるもの」という受身的表現が生まれ、そんならこの「意味される」ものはなんだという問いが生じてしまったのである。そしてこれもまた日常言語の使用が惹きおこした大きな災害の一つだということができるのである。

23

以上で本論文を終えるが、本論文はいわゆる日常言語分析派の分析法を採るものではない。つまり日常言語に理解を示し、日常言語を追認するといった立場をとるものではない。本論文の立場はどんな思考も、そして哲学的思考も、日常言語を使っているかぎりは文法的カテゴリーや文法的構文法に支配されていること、そしてそうした文法というものは現在の論理学からみるといろいろの欠陥を含んだものであり、哲学的思考もそのことによって大きな被害を蒙ってきたということを示そうとすることにあった。

哲学的思考の不完全さをヨーロッパ哲学についてだけ指摘するのはフェアでない。アジア地域の哲学についても本論文の方法は適用可能である。そしてこの仕事はアジアの哲学に明るいはずの日本人が率先しておこなうべきである。それゆえ次論文においてはそうした課題が徹底的に果されるであろう。

（平成4年7月21日）

- 1) 英文法に関しては大略は木村明『英文法精解』（培風館）および大塚高信編『新英文法辞典』（三省堂）に依拠した。
- 2) 英語では underlying, support, subsistence 等と訳される。
- 3) 女性単数になっているのは haec res（このもの）の res が略されたものだからである。
- 4) もし名詞主義哲学、動詞主義哲学、命題主義哲学といった三種類の哲学があるとすれば、命題主義哲学がもっとも健全な哲学だといえるであろう。
- 5) アリストテレスは tode ti（このもの）というコンビネーションをつくるという誤りを犯したが、この誤りは ho tis anthropos（この人間）という誤ったコンビネーション、さらには三段論法における pas anthropos（すべての人間）と tis anthropos（或る人間）という二つのコンビネーションとも連動している。要するに現代論理学は「人間」という普通名詞を主語の座から追放し、主語の座には「これ」「あれ」といった定項か、x という変項に「すべての」あるいは「或る」が結びついたもの以外はすわれないのである。つまりコンビネーションは「すべての x」と「或る x」しか認められないのである。
- 6) アリストテレスは sophia（sapientia 智）でなしに episteme（scientia 知）を大切にした。この伝統は中世のトマス・アクィナスに受けつがれ、近世に入ると science（科学）となって現代に至った。そしてこれがヨーロッパ哲学の本流である。
- 7) レッテル貼りによる弊害の最悪の例は ousia, substantia であった。そしてこの責めはアリストテレス本人に帰せられるべきである。というのも『カテゴリー論』での理論構成からいえば、どこ、いつといった問いの前にまず、何が（誰が）と何であるかという二つの問いが出されるべきである。そしてその答えは「これが」と「これこれのものである」とである。しかしアリストテレスはそうした事態を表面にはっきり出さずに実体（ousia）ということばを使い、前者の答えを第一実体、後者の答えを第二実体と呼んだ。その後 ousia はラテン語で substantia と訳され、こうした名詞がひとりあるきして、もとの意味が消えてしまう。そしてこうしたひとりあるきの substantia に関してヨーロッパの哲学者たちがいかに長い間、いかに無駄な労力を注いできたかはまことに驚嘆に価

いするものであり、他人事ながら同情を禁じることができない。

- 8) この図の詳細な説明は山下正男『論理学史』（岩波書店）を参照していただきたい。
- 9) 存在論では be 動詞が基礎になるが、be という動詞は主語と動詞だけで文をつくるという意味での完全動詞と、主語と動詞だけでなく、なお補語（complement）を必要とするという意味での不完全動詞の二種に分かれる。そして存在論が前者のタイプの be を基礎にしているとすれば S is P を基本型とする三段論法は後者のタイプの be を基礎にしているといえる。
- 10) ここでいう res は単数ではあるが、いわゆる「もの」ではなく、「こと」もしくは事態を意味する。つまり英語の matters に当る。そして実際 status rerum（事態）といういい方もある。ちなみに rerum は res の複数属格である。
- 11) いくら how でも How beautiful! と驚嘆していただだけでは科学にならない。
- 12) 前置詞が名詞の斜格を要求するというのは英語文法にもとづくものであり、古典語ではむしろ斜格が副詞の働きをなし、これを補助する形で前置詞が使用されたのであり、前置詞はもとお添えものだったのである。
- 13) hyle のラテン語訳 materia は mater（母）という語と関係する。
- 14) それゆえ即且対自（an und für sich）の且（und）は論理和でなしに足し算の和だといわねばならない。
- 15) 例えば le moi, le pourquoi は“我”という概念，“なぜ”という概念を意味しはするが，“我”という語，“なぜ”という語を意味することはない。